

**第2期宮城県教育振興基本計画の中間見直し
に関する圏域別意見交換会
実施結果**

－ 目 次 －

1	目的	1
2	開催概要	2
3	意見交換会での意見発表等概要	
(1)	気仙沼・本吉圏域	3～11
(2)	大崎・栗原圏域	12～20
(3)	石巻・登米圏域	21～27
(4)	仙台圏域	28～37
(5)	仙南圏域	38～46
別紙	出席者名簿	46～52

第2期宮城県教育振興基本計画の中間見直し に関する圏域別意見交換会実施結果について

1 目的

第2期宮城県教育振興基本計画の中間見直しに当たり、地域における教育の現状や課題等について、学校関係者や民間団体の代表者と意見を交換するとともに、教育に対する子供たちの意見を把握し、今後の教育施策に生かしていくため、意見交換会を開催したものを。

2 開催概要

圏域	開催日時	参加者（意見発表者）
気仙沼・本吉 (気仙沼合同庁舎)	令和5年6月6日（火） 18:00～19:45	① 気仙沼市立九条小学校 校長 白倉 彩枝子 ② 南三陸町立志津川中学校 校長 高橋 有 ③ 気仙沼市家庭教育支援チーム 稲荷森 裕子 ④ 一般社団法人まるオフィス 代表理事 加藤 拓馬 ⑤ 株式会社カネキ吉田商店 渡邊 重一朗 ⑥ 宮城県気仙沼高等学校 3年 内海 紗季 ⑦ " 2年 小松 輝 【その他参加者3名】
大崎・栗原 (大崎合同庁舎)	令和5年6月7日（水） 18:00～19:45	① 加美町立鳴峰中学校 校長 小野寺 英一 ② 大崎市立松山中学校 校長 日野口 香 ③ 栗原市立金成小中学校学校運営協議会 委員長 千葉 文彦 ④ 特定非営利活動法人ルネッサンスファクトリー 理事長 菅原 一杉 ⑤ キョーユー株式会社 代表取締役副社長 境 弘志 ⑥ 宮城県古川工業高等学校 3年 宍戸 遥太 ⑦ " 3年 大和田 煌太 【その他参加者5名】
石巻・登米 (石巻合同庁舎)	令和5年6月9日（金） 18:00～19:45	① 石巻市立湊小学校 校長 久保田 健一 ② 登米市立南方幼稚園 園長 星 良 ③ 東松島市PTA連合会 会長 松谷 多加子 ④ 特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク 代表 伊勢 みゆき ⑤ 株式会社鮮冷 代表取締役社長 石森 洋悦 ⑥ 石巻市立蛇田中学校 3年 阿部 建虎 ⑦ 宮城県石巻高等学校 2年 佐藤 颯 【その他参加者3名】
仙台 (仙台合同庁舎)	令和5年6月12日（月） 18:00～19:45	① 塩竈市立第一小学校 校長 堀内 瑞 ② 宮城県宮城第一高等学校 教頭 飛鳥 貴 ③ 仙台市PTA協議会 会長 高橋 由臣 ④ 特定非営利活動法人アスイク 代表理事 大橋 雄介 ⑤ 株式会社日立ソリューションズ東日本 品質生産性本部担当本部長 小寺 竜太郎 ⑥ 名取市立増田中学校 3年 伊藤 歩太 ⑦ 宮城県仙台二華中学校 3年 千葉 咲玖 【その他参加者6名】
山南 (大河原合同庁舎)	令和5年6月13日（火） 18:00～19:45	① 白石市立白石南小中学校 校長 我妻 聡美 ② 宮城県柴田農林高等学校川崎校 副校長 小野寺 基好 ③ 仙南地区子ども会育成会連絡協議会 理事 竹川 貴子 ④ 一般社団法人まなびの森 代表 坂本 一 ⑤ 株式会社ヒキチ 取締役社長 熊谷 裕一 ⑥ 大河原町立大河原中学校 3年 佐藤 絢香 ⑦ " 3年 島貫 晃輔 【その他参加者4名】

3 意見交換会での意見発表等概要

(1) 気仙沼・本吉圏域

日時：令和5年6月6日（火）午後6時から午後7時45分まで

場所：気仙沼合同庁舎 1階 大会議室（気仙沼市赤岩杉ノ沢47-6）

出席者：別紙参照

<発言要旨>

【宮城県気仙沼高等学校 3年 内海 紗季 さん】 ※意見発表

- ・ これからの学校教育では、子供たちが主体的に取り組める授業が行われるようになって欲しい。主体的な学びで思い浮かぶのは総合的な学習の時間であり、この中では、生徒自らが課題を設定し、その課題について調査したり、解決策を考えて実行したりして、その結果から考察、そして新たな課題へとといった一連の研究を行っている。この経験によって、学び方や物事の考え方、そして問題の解決に主体的、創造的、協働的に取り組む能力などの育成が期待されている。
- ・ 私自身も、この授業によって課題に主体的に取り組む力などが身についたと感じるが、他の授業でこれらの力が鍛えられたり、使われたりする場面はさほど多くないようにも感じる。変化の激しい社会を生きていくであろう、これからの子供達に必要なのは、この能力を総合的な学習の時間で留めることなく、身近な学びに応用させていくことではないか。
- ・ 私は大学入試について調べた時に、この必要性を実感した。従来のセンター試験は、その人が持っている知識や技能が問われていたが、これに対して現在の共通テストでは、得た知識を活用する力として思考力、判断力、表現力などが求められる。実際に解いたこともあるが、今までのテストとは異なり、文章やグラフなどのデータが多く、それらを組み合わせることで問題が解けるといったものだった。このような思考は、普段の授業から鍛えられるものであり、授業を聞いて与えられた問題を解くような受け身の授業では身につかない。今の授業の多くは、そうでないものもあるが、受け身の授業が多いと感じる。理解しやすい説明や板書、授業プリントから得られる学びもたくさんあるが、自ら疑問を発見したり、自ら解決策を考えたりすることでしか得られない学びがあると思う。しかも、そういった学びの方が、私の経験上、深く記憶に残りやすい。
- ・ 教科によっては、どうしても講義形式の授業になってしまうが、先生方の声掛けなどの工夫により、受け身になることなく積極的に授業を受けられるようになれば良いと思う。しかし、先生方がそのような授業をするだけでは、子供たちが主体的に学ぶようにはならないだろう。本当の意味での主体的な学びというのは、先生に言われてではなく、子供たちが普段から自ら疑問を持ったリ、学びたいと思ったりすることで生まれるものだからである。
- ・ その習慣付けは学校だけでなく、それぞれの家庭でも行われることが大切だと思う。子供が自ら学びたいと思えるような環境づくりや声掛けの仕方など、保護者向けの情報をさらに発信していくことも大事なことではないだろうか。
- ・ また、子供たちが主体的でかつ楽しい授業を受けるには、先生方がその授業を準備する時間も必要である。子供たちに興味を持ってもらえるような授業をするために、先生方が教材研究をしたり、情報を集めたりするなど、よりクリエイティブになることが不可欠だと思う。そして、子供達が思ったことを先生に伝える機会を多く設けること、担任の先生に限定するのではなく、話しやすい先生に相談できる環境づくりをすることも、子供たちが有意義な学校生活を送る上で大切だと思う。
- ・ しかし、果たして今の先生方にそのような時間があるのだろうか。小学校の先生は毎時間授業をし、中学、高校の先生は放課後や休日に部活動をしている。生徒の私から見ても、先生方はいつも忙しそうだ。これまで私が述べたことをできるようにするには、先生方がもっと余裕を持って授業のことを考えられる環境が必要ではないかと思う。

【宮城県気仙沼高等学校 2年 小松 輝 さん】 ※意見発表

- ・ 私が教育について日頃から感じていることは三つあり、一つ目はコミュニケーション能力の重要さである。私は、普段の学校生活を先生方や友達のおかげで毎日楽しく、勉強は分からないことも多少あるものの、周りに助けてもらい、なんとか理解しながら毎日を過ごしている。このため、これからの学校教育ではコミュニケーション能力を向上させることが大事だと思う。そのために

も、グループワークなど人と話す機会を増やすべきだと考えている。また、いつもと違う特別な人と話す機会を増やすべきだと考えており、例えば、今日のように大人の方々と話したり、障害がある方々と話したりする事で、知らない世界を知ることができ、大人になったときに色々な人と関わる際に必ず役に立つと思った。

- ・ 二つ目は、体験活動の充実の重要性である。私の住んでいる唐桑では、自然と関わる活動が活発に行われ、みんなで海で遊んだり、海の生物について学んだりしている。この活動のおかげで、環境問題や海の生態について小さい頃から興味を持つようになり、それを解決するために研究し、みんな自分なりの案を持てるようになった。また、私はSDGsを進めるためには、まずは理解や興味が必要だと思うので、先ほど言った人と関わる活動に加えて、自然と関わる活動が重要だと思う。
- ・ 三つ目に感じる事は、教員のイメージの悪化である。私は、将来教員になりたいと思っているが、インターネットなどで「教員になる奴は馬鹿だ」や「ブラックだ」などと騒がれているのをよく目にし、私の親も教員だが、正直大変そうである。教師は、子供が成長する上で欠かせない仕事であり、辛いこともあるが、とても楽しく素晴らしい仕事だと私は考えている。しかし、今のままの状態だとさらに教員が減り、一人一人の仕事が増え、もっと印象が悪くなり、これからの子供たちが教員を目指さなくなるのではないかと思う。また私は、小学校のころ、休み時間によく先生とみんなで遊んでおり、そのような先生が大好きだったが、会議や仕事によりなかなか先生たちと一緒に遊べないことがあった。先生方が少しでも楽になり、子供と関わる機会が増え、教員という職業の印象を少しでも良くなるような仕組みを考えて欲しい。

【気仙沼市立九条小学校 校長 白倉 彩枝子 氏】 ※意見発表

- ・ 本校は気仙沼市の地理的中心地に位置し、先ほど気仙沼高校の生徒が意見発表したが、そこから歩いて7、8分の小高い丘にある。学区には商業施設が多く大変栄えているが、学校の周りには田んぼや畑もあり、緑に囲まれた自然豊かなところである。現在、児童数は233名で、昨年度より30名減少した。震災前は400名近く在籍していたので、確実に児童数は減っている。学区には災害公営住宅が2棟あり、そこから通学している児童も10名ほどおり、また、震災関係で区域外通学している児童も29名いるので、震災の影響は12年経過した今でも残っている現状である。
- ・ 本校の教育目標は、確かな学力を備え、豊かな心を育み、心身ともにたくましく成長する児童の育成であり、「賢く、優しく、たくましく」を合言葉に、学校と家庭、地域が連携・協働しながら、日々の教育活動に取り組んでいる。詳しい内容は、本日配布した資料の学校運営構想図を御覧いただきたい。
- ・ 次に、本校の教育課題をお話する。教育課題は大きく二つあり、一つは不登校児童の増加、もう一つは個別の配慮を要する児童への対応である。不登校に関しては、昨年度30日以上欠席した児童が7名おり、一昨年度は9名だったので数字的には少なくなったが、出現率は残念ながら高まっている。本校では、この喫緊の課題に対して、昨年度から設置された学び支援教室「ほっとルームスマイル」を拠点にして、より細やかに継続的に対応している。
- ・ 「ほっとルームスマイル」には、専任の教員が1名配置され、普通教室のような教室も1室設けられている。教室には、机や椅子、ロッカーなどはもちろん、可愛いテーブルやソファ、パステル調のパーテーション、個人専用のホワイトボードなども設置されていて、とても明るい雰囲気の間になっている。不登校の前兆として登校渋りが続いたり、自分の教室に入れなかったりするなどの行動変化が見られたらその変化を見逃さず、始業時間にこだわらずに児童が決めた時間に「ほっとルームスマイル」へ登校することを勧め、登校することができたら専任教員がゆっくり話を聞いてあげたり、読書や室内ゲームなどをしたりして心をほぐしていく。
- ・ また、登校はできるけれど教室に入れない児童に対しては、「ほっとルームスマイル」を仮の教室として、学校での居場所づくりをしている。だんだん慣れてくれば、児童が自分なりの時間割を作り、自分の学びを自分でデザインしていくように声掛けしていく。その時、「音楽は大きな音が苦手だから、ほっとルームスマイルで練習する」や「図工は学級のみんなとできるから、3時間目は自分の教室に行く」など、自分の思いや考えを伝えさせながら、学級復帰にゆっくりと向かわせていく。
- ・ もう一つの課題である個別の配慮を要する児童への対応に関しては、年々多様なニーズに対応することが増えてきたが、1人1台端末の配布により学びの保障が可能になってきた。例えば、病

弱学級の児童が体の痛みがひどくて登校できない場合、授業の様子をタブレットで配信し、授業に遅れが生じないようにしている。学校と家庭をつなぐオンライン交流は、児童の健康状態を知ることでもでき、学校としても有効な情報収集になっている。

- ここからは、教育振興基本計画の中間見直し素案に対して、感想や意見を述べさせていただく。新型コロナウイルス感染症に代表される先行き不透明で予測困難な社会を生きていく児童にとって、よりよく生きるために必要なウェルビーイングや、デジタルトランスフォーメーションなどの考え方が明記され、現在の実態や状況にあったものになってきたと思う。特に本校では、不登校児童の増加や個別の配慮を要する児童への対応などについて、基本方向8の「学びの保障と教育機会の確保」は重要な施策であり、県民総ぐるみで支えていくという周知と確認がとても大切だと考えている。
- 一方、私が今校長として一番懸念していることは、児童生徒の前に立つ先生方が大変疲弊しているのではないかということである。どの施策もそれぞれ大切なものだと思うが、それらすべてを学校でやっていくには限界を感じる。学校・家庭・地域と役割分担すること、または協働していくことで、県民総ぐるみという意識や自覚が醸成されるのではないか。本校でも、今年度より学校運営協議会を立ち上げ、コミュニティ・スクールとしての活動が始まる。学校と地域の協働という点で大いに期待しているところだが、各校の校長だけでなく、市町村として、県として、子供はまちの宝、未来の宝、宝を守るのは県民みんなであるということを積極的に発信し続けて欲しいと思う。
- 最後になるが、先日、4年生の児童と立ち話をしている時、「校長先生の仕事って何ですか」と聞いてきた。子供たちは時に、こういうドキッとするような質問をする。あまりにも突然だったので、口ごもりながら「先生たちの担任の先生みたいな仕事かな」と答えたら、「じゃあ、校長先生は、“先生たちを元気にする仕事”なんですね」と言われた。“先生たちを元気にする仕事”と、あまりにも絶妙な言葉に感心するやら感動するやらであった。児童生徒の前に立つ先生たちに元気がなければ、子供たちが元気になるはずがない。校長として、働き方改革とともに、先生方が教育という仕事に充実感や幸福感を味わえるような学校経営をしていかなければならないと改めて思った。

【南三陸町立志津川中学校 校長 高橋 有 氏】 ※意見発表

- 今日、大きく4点私の意見を述べたい。その前に、前もって資料をお配りしたが、この資料はこれまでの基本方向について、本校並びに南三陸町の主な取組を記したものである。このことについては、後でお読みになっていただきたいが、今日はこれを踏まえながら、素案について私の感想をお話したい。
- まず、第2期宮城県教育振興基本計画の改定版素案の概要についてだが、計画で掲げる目指す姿と五つの目標については、制度改革やコロナ後の急速なデジタル化の動きなどを踏まえると、現計画への追記、修正箇所は適当なものであると考えている。また、本県の教育の発展につなげる横断的な視点として、教育デジタルトランスフォーメーションの推進と明記されており、GIGAスクール構想で1人1台端末やクラウド環境の整備が行われ、教育DXを実現するための不可欠な要素であると考えている。教育DXは、GIGAスクール構想が目指すべきゴールのようなものであり、横断的な視点に立って施策の展開を図ることは適切であると考えている。
- 関連して、基本方向の「確かな学力の育成」にも関わる取組だが、南三陸町では令和2年よりICT教育推進リーダー研修会を開催し、昨年度までの3年間で100名の推進リーダーを養成してきた。現在は人事異動もあり、南三陸町ICT教育推進リーダーは53名、そのうち本校は11名いる。今年度からは、情報教育担当者会で各校のICT活用の実践例、また授業での活用研修などICTを活用した授業づくりを推進していきたいと思っている。
- 2点目は、五つ目標を受けて、基本方向が10から11に追加されたことについてである。基本方向8「学びの保障と教育機会確保」について、不登校児童生徒の支援や家庭環境に課題を抱えている児童生徒への支援として、地域社会や各関係機関、学校が連携して取り組んでいく上で明示されたこと、本県の重要課題として明確化されたことは適当であると考えている。本校並びに南三陸町でも、不登校対策は喫緊の課題となっており、資料にも書いたが、行きたくなる魅力ある学校づくりの推進として、令和3年度より町独自の取組として、行きたくなる学校づくり推進事業を継続している。また、本校では不登校児童生徒の学校内外での支援の充実を図るため、学び支援教室充実事業を継続し3年目を迎えている。今後も、組織的・効果的な不登校生徒の支援に努めていき

たいと思う。

- さらに、今年度の新規事業として、南三陸町に7校ある全ての小学校、中学校の児童会・生徒会代表者会議「G7子どもサミット」を開催し、児童生徒の目線で行きたくなる魅力ある学校とは何かを話し合うことを企画している。先ほど気仙沼高校の2人の生徒が発表したように、小学生と中学生の目線から一体どのような学校が行きたくなる魅力ある学校なのか、子供たちの意見を吸い上げながら、私たちがこれから考えていく行きたくなる魅力ある学校とはどんなものかについて、改めて話し合う機会にしたいと思っている。
- 3点目は、家庭・地域・学校が連携・協働して子供を育てる環境づくりについてだが、南三陸町では、今年度より町内小中学校7校全てに学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールになった。組織としては、志津川中学校区4校と歌津中学校区3校に分かれて連携し、各校の運営計画に基づき、地域と学校の連携・協働を推進する仕組みとしている。資料にも書いてあるが、本校の組織としては、学校教育活動部会、防災安全活動部会、地域教育活動部会、連携教育活動部会の4部会を設置し、地域とともにある学校づくりを推進していきたいと考えている。この4つの中に、実際に今学校で抱えている課題と推進していく事項が全て網羅されている。詳しくは後ほど資料を御覧いただければと思う。
- 4点目は、部活動の地域移行についてである。地域移行の現状について、まず、部活動の加入については全員加入制を継続していく。部活の種目は12競技あり、基本的に現状維持していきたいと思っている。資料にも示してあるが、部活動の部員数及び外部コーチ等については、夜練で外部コーチが関わっている部活動が12競技のうち10ある。こういったところを受け皿にしながら、地域移行について話し合いを進めていきたいと思っている。ただし課題があり、本校を含めて気仙沼管内はどの学校も生徒数が減少しており、先日行われた中総体でも、チーム競技では合同チームによる参加が多く、新人戦ではさらに合同チームが増えることが予想されるなど、各競技種目の存続が難しい現状である。このため、部活の再編を考慮しながら地域移行を考えていく必要がある。
- また、南三陸町の各競技団体や協会等の会員数も減少しているのが現状であり、基本的な受け皿は南三陸町を中心に考えているが、現状を踏まえると地域移行が広範囲に広がるのが懸念される。広範囲になった場合、行政側からのこれまでの補助、あるいは支援体制がどのような形で進んでいくのかということについては、今後、行政側とも話していかなければならない懸案事項である。以上の課題を踏まえながら、本校の部員数と地域の現状も含めて、外部団体、あるいは部活動の親の会と協議をしていきたいと考えている。
- その他、「確かな学力の育成」、「郷土を愛する心と社会に貢献する能力の育成」、「命を守る力と共に支え合う心の育成」、「安心して楽しく学べる教育環境づくり」に向けた本校並びに南三陸町の具体的な取組については、資料を御覧いただければと思う。
- 最後に、私が志津川中学校に来て4年目になるが、本校の教育目標の具現化を図るため、「志中 as No.1」というキーワードを子供たちと職員に示している。これは、一番であるという誇りのある学校を目指しており、自分で「志中 as No.1」を目指すということではなく、周りの地域や家庭、あるいは他の学校から、志津川中学校が素晴らしい学校だと認められて、初めて「志中 as No.1」が達成できるのではないかと考えている。そのためには、自己ベスト、今の自分を超越る、今の自分を磨いてさらなる飛躍を遂げる、そういう力を付けさせていきたいと考えている。志津川中学校では、昨年度からこのことをさらに明確化しながら、どんな活動においても「志中 as No.1」を目指し、今後も生徒138名、そして教職員含めてみんなでチーム一丸となって「志中 as No.1」を目指していきたいと考えている。

【気仙沼市家庭教育支援チーム 稲荷森 裕子 氏】 ※意見発表

- 地域で子育てをして行く上で、「これってどうなっているんだろう」や、「お子さんたち、お母さんたちはどうしたいんだろう」、お母さんたちご本人から「こうしてほしいのよ」という意見がよく聞こえる場所に私はいる。家庭教育支援チームは、平成19年に県の家庭教育支援総合事業を市の教育委員会生涯学習課が受け、家庭教育推進協議会が設置され、それから名前やメンバーが変わり、家庭教育支援チームとなったものである。メンバーは多種多様な人材を揃えており、子育て経験者、元保育士、元小学校の先生、元主任児童委員、養護教諭の資格を持った方、幼稚園教諭や保健師など、19名が所属している。

- ・ 特に紹介したいのは、子育てほっとサロンというもので、子育て中の親子を対象に、悩みや不安を話すことや情報共有を行うことを目的に立ち上げ、人形劇や体操、講話など、学習の場として平成24年度から実施している。それまでは2か月に1回。年6回だったものを、平成29年あたりから年10回に回数を増やし、子供と親御さんが集まる場の提供と交流を目的に企画している。
- ・ もう1つ紹介したいのは、就学期・思春期子育て講座というものを行っている。小学校入学前の説明会後の時間や、帰りの会の時間などを頂き、家庭教育支援チームのメンバーが保護者に対して話す機会を設けている。これは、スピリチュアルな話をする方もいれば、「家庭の中ではこういう風にするべきだ」と強めに話す方もおり、子育て時の声掛けやコミュニケーションについて具体的な話をしている。私も何度か話をしているが、私は地域の中で子供を育てる、地域の中で育っていくというテーマで話をしてきた。
- ・ 毎年、学校の方からこういった場を持っていただきたいという話があり、学校としても、やはり入学前に保護者に対しての説明が必要だという危機感を持っているのかと思う。子供に対してどのように声掛けをして欲しいのか、自分はどうしたらいいのかという保護者に参加してもらっている。現在、チームの方では、先ほどの就学時の説明会の時に、各先生、各地域のおばちゃんが色々な話をするのではなく、同じ内容を話すプログラムを作り、幼稚園や保育所で保護者向けに話ができるように計画を進めているところである。
- ・ 先ほど、生徒のお二人から、「先生は大変だ」、「学校の先生になりたいけどイメージが悪い」という話があったり、学校の先生方から、先生方のご苦勞の話などもあったりしたので、当事者だけではなく、地域のおっちゃん、おばちゃん達を上手く絡めて欲しいと思う。理想の子供と理想の自分というギャップも、子供の中でこれから出てくると思うので、親御さんとお子さんが少し大きくなった時に、「大変だったけど面白かったよね」と言えるように、私たちも関わりたいと思うし、プログラムを周知できるようにしたい。
- ・ プログラムの紹介は以上だが、課題提言という形で話をさせていただく。困窮などにより勉強できる環境ではない子供、学校を学ぶ場として捉えていない子供がいる。どこにいても学べる、学校には行かないけれども学校教育をきちんと受けられるよう、気仙沼にもフリースペースや色々と活動されている団体がいる。
- ・ 家庭教育支援チームという名前は背負っているが、地域に住むおばちゃんの1人として色々なところを回る中で、学校の先生や子供本人、保護者、民生委員、医療機関の方からも相談いただくこともある。生徒から、「どうすれば上手くみんなと話ができるのだろう。親にも先生にも言えないし、お世話になっている地域のお兄さんたちには、仲が良すぎるからこそ言えない。頑張っている自分を見て欲しい人に、落ち込んでいるところを見せたくない」と話をいただくこともある。本筋からは外れてしまうが、こうした相談を子供だけでなく、家族の方が相談できる場所、「きちんとここにあるよ。ここに行けば相談ができるよ。ここでは無理だけど、そこに行けばあなたが抱えているものを聞いてくれる人がいるよ」とアナウンスする場が必要だと感じている。

【一般社団法人まるオフィス 代表理事 加藤 拓馬 氏】 ※意見発表

- ・ 私の出身は兵庫県で、東日本大震災の復興支援のボランティアで気仙沼に来たことをきっかけに、こちらに移住した。当時、大学を卒業したばかりで、内定していた会社を断り新卒無職のボランティアとして唐桑半島に入ったのがきっかけだった。そんな私がなぜ生き延びることができたのかというと、もちろん地元の方々に育ててもらったのが一番ではあるが、宮城県の地域復興支援助成金にずっとお世話になっていた。その時に唐桑半島で何をしてたのかというと、子供達の体験学習などをしており、そこにいつも参加してくれたのが小松輝君だった。そういった復興地域づくりをやっていく中で地域の子供達と出会い、持続可能な社会に向けての教育の在り方というところに非常に興味を持ち、今、まるオフィスで教育事業に取り組んでいる。
- ・ 取り組んでいる内容を簡単に紹介させていただく。資料の1ページ目は、まるオフィスの教育事業として力を入れているところ、代表的なところをいくつかピックアップしたものになる。横軸が左に行くほど学校教育に近いもの、右に行くほど地域教育・社会教育に近いものとして、縦軸に小中高となる。
- ・ まず、我々の事業領域としては、中学生、小学生の探究学習支援事業を市の教育委員会と一緒にやらせていただいている。2つ目として、高校生に向けて市の教育委員会、高校、商工会議所の産官学でコンソーシアムを組んで、高校生の学びを支える仕組みを展開している。3つ目は中高生

の「問いストーリー」。これは完全にまるオフィスのオリジナル事業として行っている。ポイントとしては、地域教育と学校教育を行ったり来たりしているところ。そして、気仙沼の中高生に地域の中で継ぎ目のない探究学習、探究的な学びの環境をつくっていききたいと思っている。震災直後からずっと行ってきたが、小学生対象の探究の前段階の探検や体験も大切に、市の教育委員会と一緒にいるところである。

- もう少し詳しく各事業を紹介していく。まず、中学生・小学生に行っている探究学習支援事業については、探究学習コーディネーターを各小中学校に派遣している。メインは市内に10校ある中学校になるが、そこで総合的な学習の時間のサポートをしている。また、その総合的な学習の時間で探究的な学びを展開している先生たちのサポートをしている。さらに、授業の時間では物足りない、もっと探究したいという有志の中学生を放課後に集め、プロジェクト探究部として、部活ではない非公式な集まりになるが、先生たちの協力を得て設置して活動している。2年前に鹿折中学校の校長先生と一緒に始めた取組で、昨年度は市内7校の中学校の先生にやろうと言っていたいき、今年度は全10校でこのプロジェクト探究部を設置する予定である。また、昨年参加してくれた7校51名の有志の生徒たちを集め、プロジェクト探究フェスタという探究学習の中学生の発表会を開き、大変盛り上がった。
- 探究学習を行っていると地域に飛び出して行くことになり、例えば、地域をPRするパンフレットを作りたいとなれば、教室に居ても仕方ないので、休日に漁師さんのインタビューをしたり、授業の時間を使ってフィールドワークに行ったりといったことが起きる。そういったサポートやコーディネートを我々がやっている。また探究学習自体が新しいものであるため、探究学習について教員研修で学びたいという話を小学校、中学校からいただき、そういった研修も行っている。なお、市とNPOの協働ということで、メディアにも取り上げていただく機会が増えている。
- 高校生に対しても、震災直後から気仙沼高校の先生方に受け入れていただき活動を行っている。昨年度によりやく学びのコンソーシアムが立ち上がり、地域ぐるみで高校生の学びを支えていく仕組みが整い始めている状況である。コンソーシアムの事業で具体的に何を行っているかということ、地元産業と高校生の学びを起こそうということで、コラボ企画を行っている。例えば、地元企業のCMを制作するもので、高校生が取材をして、CMをYouTubeにアップするということまでやる。こういう夏休みの活動をコンソーシアムで事業展開したり、東京のビッグサイトで行われたスマートエネルギーの展示会に、高校生と地元の企業の経営者が一緒に行き、世の中で起きている最新の事、近未来の事を見て視座を高めようという企画を試験的に行ったりした。このように、地域の中で学ぶということだけにとらわれずに、地域の外に越境して大人と学びを起こすということにもチャレンジしている。
- また、リベラルアーツというキーワードを掲げ、池上彰さんに気仙沼まで来て講演会をしていた。さらに、中学生でも行っている探究学習のナミカゼという塾を高校生向けに開設し、ここでも1人ひとつのテーマを持って、高校生が探究をしている。今年度に関しては、5月末の時点で25名の高校生がエントリーしてくれている。
- 探究学習を経験した生徒が今どんどん卒業し、OB、OGとして大学をはじめ色々なところで活躍してきている。こうした先輩に地元に戻って来ていただいて高校生のサポートしてもらおうということで、学生コーディネーターという制度も発足した。昨年度、みんな大学1年生だが、5名の方を任命し、東京からの旅費を支給してタダで帰省してもらおう代わりに、高校生の探究学習の壁打ち相手や、大学生活ではどんなことしているのか、高校時代の探究がどのようにつながるのかを話してもらおうということをお願いして、コーディネーターとして生き生きと活動してもらっている。
- さらに、オリジナルの事業行っている中高生の「問いストーリー」ということで、地域の人に探究学習を知ってもらおうと、生徒を起点にした「問い」を、探究的な学びは非常に魅力的だということを伝えるために漫画で発信している。こういった高校生の探究学習、またはプロジェクト型学習が非常に県内でも注目されてきており、マイプロジェクトアワードというアワードでの実績にもつながっている。
- 最後に、現場で活動している課題感を共有させていただく。やはり、こういった探究的な学びのサポートは非常に手間がかかり、このサポートを先生たちをお願いするのは大変なので、サポートを充実させるためにも、コーディネーターがもっと充実していけば良いと思っている。ポイントとしては、先ほどお伝えしたように、探究的な学びを通して児童生徒は地域へ飛び出す。これを

学校教育と社会教育に切り分けるのではなく、リンクさせる大きなチャンスでもある。ただし、体験学習と異なり、数十人連れてって船に乗せて良かったと、みんなで帰って感想を書きましようというわけにはいかず、本当に一人一人様々なテーマになる。40人学級だと40人の探究テーマがある。それを先生たちに丁寧にサポートしていただいているという状況になる。地域でも、受け入れといっても今までと一味違うものを求められる。このため、地域と学校行き来できる、もしくは小中高を行き来できるコーディネーターの存在が鍵になると思っている。官民共同でこのコーディネーターの設置をぜひ推進していきたい。

- ・ 実際に地域でプレイヤーとして活動されている方をコーディネーターと呼ぶ場合もあるが、これはコーディネーターではないと思っている。地域でプレイヤーとして活動している方々と学校を柔軟に結ぶコーディネーターが必要だと思っている。こういった個別最適な学びというのは、生徒数が減れば減るほど手厚くできる。そういった意味では、小規模になっていく子供たちや社会全体というのを逆手にとって、強みに変えるポイントだと思っている。ローカルだからこそ個別最適な学びが進んでいると社会の中で認知されれば、田舎で子育てをしたいという人たちが必ず都会から地方に流入すると思っているので、ぜひ地域づくりの観点からも探究学習コーディネーターの充実を考えていただきたいと思っている。

【株式会社カネキ吉田商店 渡邊 重一朗 氏】 ※意見発表

- ・ 企業として感じている一つ目の課題は、地元の就職意欲の低下である。地元就職を希望する生徒が少ない状況は、弊社にとっても懸念すべき課題になっている。企業説明会で生徒と話していると、魅力が低いなどの具体的な理由ではなく、そもそも地元企業が知られていない。このため、就職情報の充実のために、宮城県や地元商工会、南三陸高校、登米総合産業高校と連携し、高校に出向く企業説明会に参加して、地元企業の情報提供を行っている。
- ・ また、産学連携の取り組みとして、今年南三陸高校で地域学というのを行う予定であり、そのうちの何時間か弊社で講師を派遣し対応する予定になっている。とにかく、地元の企業を知ってもらい、どのようなことをしているのかを分かってもらった上で、就職の選択肢の一つになるように現在取り組んでいる。
- ・ 二つ目の課題は、就職・進学に関する情報である。自分で主体的に情報を調べている方は良いが、高校生の就職活動は学校のサポートがあり、競争相手は同じ学年の高校生だけという、いわゆる守られた就職活動になっている。一方、大学や専門学校に行った人達は、自分でアクションを起こさなければ何も起きない。こういうことを多くの高校生は理解していないし、分かろうとしていない。
- ・ また、高校進学を決める段階で、どのような企業の就職先があるのか、どのような大学の指定校推薦があるのかも知らない。例えば、登米総合産業高校だと、機械科や電気科で実はトヨタ自動車の求人が来ているが、生徒に聞いてもほとんど知らない。おそらく、中学生は全然知らないで進学を決めていると思う。昔に比べれば、多くの情報が学校には公開されていると思うが、生徒や保護者の方が興味を持って知ろうとしていないのが現状だと思う。やはり、中学生や高校生の時点で、就職・進学に関する情報について、興味を持てる手法で知る機会を作っていくことが必要だと思う。
- ・ 三つ目の課題は、ITに関する教育について、学校側で色々を行っていると思うが、将来的に必要なスキルになっているとは言い難い状況である。時代の変化に伴い、新たな技術や知識が急速に進化しているのは分かるが、それに対応しきれないというイメージを企業は持っている。例えば、履歴書でワード・エクセルが使えると書いている生徒にどのくらいできるのかを聞くと、キーボードを打つのが早いだけのことが結構ある。実際、就職してからでは、スピードよりも文章の構成力や、エクセルであれば情報処理の能力、関数を使った処理が大事になってくるが、就職を希望する子供はキーボード入力を優先している。
- ・ また、例えばSNSなどのコミュニケーションツールを通じて日常的に情報を発信していると思うが、どうしても一部だけの発信になってしまい、正式な文章の作成に慣れてない傾向がある。例えば、メールの文章の返信の仕方など、学校でも作る機会はあると思うし、そういった時間もあると思うが、やはり数回やっただけではなかなか身につかない。就職してからメールをどうしたら良いのか分からないという方も結構いるので、できれば日常的に使用する機会を学校にいる間に作ってもらえればと思う。

- ・ 四つ目の課題として、学校と実社会が連携した実学の強化をしていただきたい。学校は単なる知識習得の場にとどまらず、実社会とのつながりを持ち実生活に即した学びを提示する方が、より良い結果を生むと思う。良い例として挙げられるのは、南三陸高校の部活動の商業部である。商業部は、コロナ前に南三陸町が月末に行っていた復興市に毎月出展し、仕入れから準備、販売につながる一連の商売の流れを実体験として経験することができていた。弊社でも数名商業部出身の生徒が就職しているが、やはり実社会との接触があり、仕事に対する感覚のギャップが少ないおかげか、とても定着が良く非常にやる気もあり、良い傾向にあると思っている。やはり、実社会でのマナーやコミュニケーションの取り方、社会人としての常識については、高校によって教育内容や環境が違うので一概には言えないが、就職希望の生徒に対しては、実学で事前に学習する機会があれば良いと思う。
- ・ 以上、4点の課題を話したが、これらの地域の教育の課題を克服することが、より良い教育環境を築くために必要な要素だと考えている。我々も、未来を担う子供たちにとってより良い教育を提供するため、地域全体で力を合わせる必要があると思う。

—意見交換—

【佐藤副教育長】

- ・ 意見発表の中で、教員の多忙化の問題が大きいという御意見があった。また、主体的な学びを支援する探究的な学習についても御意見があり、皆様から感じたことや補足があればお願いしたい。
- ・ 最初に発表いただいた内海さんの御意見で、探究的な学習あるいは総合的な学習の時間の中では主体的に取り組めるが、他の授業ではそういった要素がなかなか難しいという話があった。加藤さんは探究的な学習に取り組まれていると思うが、他の教科や学校活動全般の中で、探究的な要素を入れていくのにヒントや考えがあれば教えていただきたい。

【一般社団法人まるオフィス 代表理事 加藤 拓馬 氏】

- ・ 各教科における探究化というのは本当に課題で、今は探究学習というと地域のことをしないとイケないと先生たちが思っているのが、もったいないと感じている。「先生が担当している教科で探究できますよ」というのもっと広げていきたい。×(掛ける)地域ではなく、例えば、防災をテーマに探究するのであれば、防災×数学で探究できないか、防災×生物で探究できないかと先生に投げかけると、先生は担当の教科がとても好きなことが多いので、生き生きし始めたりするという経験がある。探究学習イコール地域といったイメージ強すぎる場所があり、教科の探究化というのは、これから伸びしろがある部分だと思っている。

【佐藤副教育長】

- ・ どうしても最初に地域がきてしまうが、もう少し視野を広げ、それぞれの教科をどのような切り口で学ぶことができるのか工夫や発想が必要であるということだった。そのように考えてみると、やはり先生の多忙化解消というか、色んな視点で考えるクリエイティブな時間が大切になってくる気がする。そういう意味で、学校だけではなく地域や家庭との関わりの中で、先生の時間づくりにつなげていければ良いが、学校の立場から御意見をいただければと思う。

【気仙沼市立九条小学校 校長 白倉 彩枝子 氏】

- ・ お話を聞いて、応援団というか、つないでくれる方がこんなにもいるのかと思った。私たちは、どうしても自分たちで完結しようとするところがあり、もっと地域に開かれた学校にしないといけない。なので、学校の中だけではなく、学ぶところはもっと広いという意識と、そういう人たちがいるということをもっと認識し、つなげていくことが必要。
- ・ 先生方も「元気がないのかな」と思われるのは、楽しめていないからであり、総合的な学習、特に探究的な学習は、自分たちが楽しまなければならないが、なかなかそうはいかない現実がある。でも、こうやって外の方や地域の方たちとつながると、もしかすると新たな発見があるかもしれないと感じた。

【南三陸町立志津川中学校 校長 高橋 有 氏】

- ・ 南三陸町では、2014年に、大正大学による出前講座である「森里海連環学」を総合的な学習の中に位置付け、出前講座を行っていただいた。この「森里海連環学」については、大正大学の先生方の人脈を通して、地域の方ではなく色々な専門家の人たちに来ていただいたが、震災後10年を一区切りに、支援を終えることになった。
- ・ 私が来た時にはこうした状況になっていたが、やはり地域の方々とともに、もう一度「森里海連環学」を持続可能な形で、総合的な学習のみならず他の教科と横断しながら取り組んでいこうということで、今年度、色々な人脈や企業の方との点のつながりを、線で結んでいこうとする取組をしている。その中で、テーマとして「環境・エネルギー」、「人権・平和」、「伝統・文化」、「防災・安全」、「情報・技術」の5つを課題にし、環境やエネルギーは理科に、人権や平和は社会に関わってくるといったものを今作り上げようとしている。
- ・ これに関わっているのが、南三陸町出身の宮城教育大学准教授の佐藤明美先生で、先生を中心として、全校対象に探究活動とは何か、「森里海連環学」とは何かということ、南三陸町以外の世界のサイクルがどのようになっているか座学してもらった。その後、先週になるが1年生が自然の家に行き、今度は南三陸町の「森里海連環学」について課題を持たせるための講座を開いた。そういったところも含めて、この「森里海連環学」を一本の柱にしながら、色々な形の防災教育や避難所運営訓練、様々な伝統文化の関連などを、志津川中学校では形にしていきたいと思っている。
- ・ また、コロナの影響で今まで行ってきた職場体験ができなかったが、今年度、南三陸町の職場に体験をお願いしたいと思い、いくつかの企業をお願いをして、これから選んで職場体験をしていくこととしている。
- ・ さらに、志津川中学校と南三陸高校は中高一貫の連携をとっているが、昨年度、歌津にあるNPO法人さとうみファームという、わかめを餌にした羊「わかめ羊」を東京で売りたいので、缶詰のデザインをして欲しいという依頼が、当時の志津川高校の生徒からあった。志津川高校の生徒がさとうみファームに行って探究をし、志津川中学校に来て、生徒たちがプレゼンをして、それを中学生が聞いて、そしてコラボしながら缶詰のパッケージングをした。今年度も中高連携を含めて、授業の中にそういったものを取り入れていきたい。

【佐藤副教育長】

- ・ 地域で様々な活動をしている方のお互いの情報発信と、つながりを作っていくこと、そこからお互いができることを広げていくのが大切なのではないかと感じた。そのほか、これまでの発言内容や県の計画素案について御意見があればお願いします。

【一般社団法人まるオフィス 代表理事 加藤 拓馬 氏】

- ・ 多忙化問題について、これほどそれぞれから御意見が出ると思っていなかったもので、私自身も驚いている。高校生からも出たということは、まさに教育振興の一丁目一番地になりつつあると今日改めて感じた。そういったところをどのように基本計画に反映させていくのか、ぜひ検討いただきたい。資料の施策全体のイメージの基本方向9に、先生たちの資質・能力の向上と書いてあるが、もっと大きくなって良いところなのではないかと感じた。
- ・ 部活動の地域移行が進めば先生の負担軽減につながるのではという話もあるが、先ほどお話があったとおり、そもそも競技が成り立たなくなりつつあり、特に地方では問題が一步先に行っている。都市部の課題とは切り分けて、地域の連携や教員の負担軽減について、宮城県として先駆けて議論を始めて欲しいと思った。

【熊谷教育企画室長】

- ・ 今回、基本計画の見直しをするに当たって、教員の負担軽減というのは非常に重要な課題だと認識をしている。今、皆様から御意見いただいたが、やはり地域との連携や福祉など他の分野との連携が欠かせないと思っている。今回、気仙沼地区を皮切りに5圏域回らせていただくが、地域の皆様の声を伺って、具体的な連携方法であるとか、ICTの活用で負担軽減が図れるのかなど丁寧にお話を伺いながら計画をまとめ、この基本計画が現場の先生方へのメッセージになるような計画になれば良いと思っているので、いただいた御意見を踏まえ対応を考えてまいりたい。

【佐藤副教育長】

- ・ 教員の多忙化解消は、本当に大きな課題だと考えている。計画を作って働き方改革にしっかりと取り組んでいきたいと思っている。特に、先生のワークエンゲージメント、やりがいというものを感じられるような、忙しさを解消していくということももちろんだが、やりがいのある職場づくりに取り組んでいきたいと思っている。

(2) 大崎・栗原圏域

日 時：令和5年6月7日（水）午後6時から午後7時45分まで

場 所：大崎合同庁舎 5階 501会議室（大崎市古川旭4丁目1番1号）

出席者：別紙参照

<発言要旨>

【宮城県古川工業高等学校 3年 穴戸 遥太 さん】 ※意見発表

- ・ 私は、高校を卒業したらどのような仕事に就こうとも、地元宮城で就職して働き、幸せな家庭をつくりたいと考えている。そこで、資格がたくさん取れ、就職に強い古川工業高校を選び、道路や橋など自分で造ったものを人々に使って欲しいので土木情報科に進んだ。
- ・ 土木情報科のカリキュラムには専門教科がたくさんあり、難しいことをたくさん覚えなければならず、工具の名前を覚えること、測量するに当たってどのような方法で測量するのが一番良いか判断すること、許容誤差内に測量すること、許容誤差を計算することなど、これらの技術を身に着けるのはとても難しく、大変だと感じている。
- ・ それと同時に、この知識が道路や橋を造るために必要なのだと思うと楽しくなり、これが自分の将来の夢につながる一歩だと思うと、幸せな気持ちになる。小中学校の授業ではなぜ勉強するのか、それがどこに使われているかわからなかったが、高校で授業を受けていると、先生方はその知識がどの場面で使われているか話してくれる。働くということ、何かをつくるということなど、学んでいる知識が世界をつくるために使われていることがよく分かった。
- ・ そして、普通科目は専門科目を学ぶための基礎知識であったこと、高校生になって学び始めた専門知識は、道路や橋を造るために必要な知識だったことなど、何に使うのか、どこに使うのか、いつ使うのかが明確になった。それによって、難しい問題が出されたときに、あきらめずに頑張ることができ、難しくても楽しいと感じ、自分がどんなものを造りたいかを考えられるようになった。
- ・ ある先生から「工業高校で実習する意味は何だと思う」と聞かれ、「技術を習得すること」と答えたことがあった。先生は、「それだけではなく、危険予知をすることだ。重機を動かす時にどこにいれば安全なのか、どんな危険があるのか、1人で作業してよいのか、どうして2人で作業するのか、2人で作業する時に何をするのかなどを考え、危険予知をしながら実習をすることが大切だ。」と話し、この知識は、重機を動かすときだけ使うのではなく、あらゆる作業に応用できることだと教えてくれた。それを聞いて私は、社会に出て役立つ授業をしている、古川工業高校に入学して良かったと感じた。
- ・ ここまでは、私の経験から感じたことだが、社会で役立つと感じる授業がたくさんあり、たくさん資格が取れる高校、就職先がたくさんあり、自分の夢が実現できる高校、友達などと楽しく会話ができ、毎日学校に行きたいと思える高校、授業中と休み時間とのメリハリがしっかりしている高校に行きたいし、行って良かったと思っている。

【宮城県古川工業高等学校 3年 大和田 煌太 さん】 ※意見発表

- ・ 私は、少しでも早く社会に出て、両親に頼ることなく自立した生活を送りたいと思っており、古川工業高校に入学し、専門的な技術を学んで一人前の社会人になろうと考えた。また、古川工業高校の授業では、重機の操作ができると聞いており、普通科の高校では経験できないところにとっても魅力を感じた。入学後の実習では、重機の操作、測量、製図、図面作成、CAD等のコンピューターの操作などを習い、国家資格である測量士補、二級土木施工管理技士の勉強もしている。
- ・ 古川工業高校の実習や授業は、実際に社会に出て働くことを前提に行われており、経験豊富な先生たちが職場のことや職場での働き方を教えてくれるので、働くということがどのようなことなのかよく理解できる。これらの勉強は、難しいこともたくさんあるが、会社に勤めた時にはすぐに役立つと思っていたので、頑張ることができた。普通高校ではこのような勉強はしないので、社会に出て一から学ぶことになると思うが、古川工業高校で多くのことを学習済みのため、負担が少なく働くことができると思ったからこそ、難しい専門教科を頑張ることができた。
- ・ また、就職先を考える時には、先生方は私の強みや弱みを指摘してくれて、そこを踏まえて就職先の相談に乗ってくれる。こうした先生方の支えがあるので、生徒たちは働くことをイメージすることができ、働くことへの不安がだいぶ取り除かれている。

- ・そして、就職希望の会社には、卒業した先輩たちが古川工業ブランドを作ってくれているため、私たちに対する企業からの信頼も厚く、私たちが考えている以上の多くの有名企業からも求人を受けられるので、就職先の選択肢が多く、とてもありがたいと思っている。こうした多くの企業に先輩たちが働いているため、私たちも就職後の人間関係などの不安が取り除かれ、安心して入社することができると思っている。私はこれから、先生方や保護者と相談しながら就職先を決めるが、自分の希望である建設業の仕事につき、地図に残るような仕事がしたいと考えている。
- ・最後に、古川工業高校に入学してよかったと思ったことは、生徒一人一人の個性を大事にして、長所や短所を一緒に考えてくれる先生方や、目の前のことだけでなく、働き出してから、さらに将来までも考えてくれる先生方がたくさんいたこと。これが、これからの学校教育で大切にすべきことだと思う。

【加美町立鳴峰中学校 校長 小野寺 英一 氏】 ※意見発表

- ・加美町立鳴峰中学校は、旧宮崎中学校と旧小野田中学校が統合して今年度4月に開校した。全校生徒は216名。開校に向けた準備委員会は令和3年7月15日に発足し、約1年半の間に9回開催された。メンバーは教員、保護者、卒業生、そして教育委員会を含め総勢約30名が毎回参加し、小野田・宮崎地区の教育の課題、そしてあるべき教育の姿を追い求めてきたので、鳴峰中学校及び学区の現状を踏まえながら、題して「めんこい生徒育成プロジェクト」ということで話をさせていただく。
- ・まず、鳴峰中学校区の実態だが、雄大な自然が恵を与え、人の温かさ、優しさがあふれている。人口密度が低く伸び伸びしている。中村太鼓などの伝統文化がある。地域のつながりが濃くPTAが協力的。ここからあえて強調するが、子供たちが素直で伸びしろが多い。農業や観光業など特性を生かした産業がある。そして長男長女が後継者である。子供たちの伸びしろが多いということは、学んだことが実になるということで、その後高校、大学への進学を契機に一時的に校区を離れることになる。また、農業や観光業などの産業が盛んであるということは、就ける職業に限られ将来校区に戻りたくても戻れないということ。長男長女が後継者というのは、後継者とならない場合には校区を離れるとなかなか戻ってこられない。これが実態である。
- ・鳴峰中学校区理想としては、伸びしろの多い子供たちが、大学に進学し、その後、地元産業の後継者として、例えば農業大学を設立して、そして日本自然共存農業株式会社のような会社や世界自然産業機構のような組織を立ち上げ、社員数5千人ぐらいが集まると良いと思っている。そして結婚・子育てを経て、鳴峰中PTA会員になって、令和20年度には会員数が2千人と、このようなことになるのが理想。ところが、なかなか現実はいかない。せめてもの鳴峰中学校区の願いは、子供たちが大学を出た後、都会の企業に会社員として楽しく勤務し、取締役になって楽しい職場を作る、結婚して楽しい結婚生活、楽しい子育て、大都会で楽しいPTA活動して、退職後に鳴峰中学校区に戻って楽しい老後を過ごして欲しいと思っている。
- ・ここで、楽しいという部分に焦点を当てて、楽しいとは幸福感が得られることと捉えてみた。では、どのような時に皆さんは幸福感を持つのか。私は、美味しい物を食べている時、目標を達成した時、人に感謝された時、喧嘩して仲直りした時、好きな人という時、お風呂に入っている時、目覚ましをかけないで寝る時、大変な仕事をやり終えた時。これらを大きく分けると、ワクワク感、安心感、達成感のこの三つの感じがある。学校生活の中で幸福感を味わえる場面は、安心感ほどの生徒にも居場所があると感じる時、ワクワク感はみんなで何かに取り組む時、達成感は何かを成し遂げた時である。
- ・鳴峰中学校歌は、竹森マサユキ氏を中心に、在校徒も一緒になって作り上げた歌詞に、竹森さんに曲を付けてもらった。この歌詞にある、「葉來の峰 朝日に照らされ 湧き上がる情熱が時代を創造る」、これが創造。そして2番に「磨き合い育まん 優美の心」と優美があり、次に「ともに生きよう」とある。この創造、優美、共生が本校の校訓になっていて、校訓が入った歌詞になっている。
- ・生徒に車椅子の子がいて、その子は生まれながら歩けないだけでなく、言葉を発するのも抵抗があるのだが、応援団の副団長を務めている。応援する場面では、「団長エール」という声をやっとの思いで発するのだが、当然のことながら、それに対して笑う生徒は一切いない。この生徒は、先生に誘われて「ぜひ副団長をやりたい」という思いで引き受けてくれている。応援団長は、旧小野田中学校の出身の2年生で、3年生に希望者がいなくて「僕で良ければやります」と。その生徒は

勉強が苦手なのだが、そういったところで一生懸命やっている。このように、壮行会の場面では、一人一人が自分のやれることを精一杯やっていく姿を見ることができた。

- ・ 壮行会で掲げた「燃えろ鳴峰生、鳴峰魂」という横断幕。これは、40歳になる小野田中学校の卒業生が資金を貯めて、今回の開校に合わせて寄付してくれた。その子供たちは、結構やんちゃな子供たちが多く、先月末に10人ぐらい校長室にやって来て「これ作ったから」と持ってきてくれた。地域と生徒が一緒になって作り上げた壮行式だった。
- ・ 学校目標は、「ふるさとを愛し、夢に向かって歩み続ける生徒の育成」。校訓は創造、楽しく学び、よりよく生きる力を育む学校。優美、美しく生きる、安心して学び誰もが行きたくなる学校。共生、ともに生きる、活力に満ち、共に磨き上げる学校をつくっていききたいと思っている。
- ・ 鳴峰中学校区の合言葉として、ふるさとの子供たちのために一緒になって、地域も生徒も教員も一緒になって、そして本気で動くと。また「めんこい」という言葉が好きなので、本当にめんこいふるさとの子供たちのために、一緒に本気で動くということをやっていききたいと思っている。この、「めんこい」「一緒に」「本気で」「動く」の頭文字を取ると「め・い・ほ・う」になるので、みんなですべてを覚えて合言葉にしていきたい。
- ・ このようなことを実現するためには、やはり一人一人の子供たちに丁寧に寄り添うこと。そのために加配職員や町の補助員の配置など、様々な力添えをいただいているところ、これからも頑張っていきたいと思っている。

【大崎市立松山中学校 校長 日野口 香 氏】 ※意見発表

- ・ 今春から松山中学校に新任校長として赴任し、現在本校で取り組んでいることとお話させていただく。まず、本校は共に学ぶ教育推進モデル事業のモデル校として、ユニバーサルデザイン（UD）の考え方を取り入れた教育活動の展開に取り組んでいる。今年は、3年計画の3年目、最終のまとめの年になっている。この共に学ぶ教育推進モデル事業は、インクルーシブ教育システムの推進を目的とした事業であり、私も2ヶ月前から参加している。この事業は、一期3年の計画を三期計画で推進し、計9年となっており、今年が三期目の3年目として事業のまとめを行うので、非常にプレッシャーを感じている。3期目は地区単位、地域単位での取組というところが大きな特徴と捉えている。松山小学校と松山高校が本校の近くにあり、この三校で協力し進めているところ。本校の取組を簡単にお話させていただく。
- ・ これまでの取組ということで、1年目は、子供たちが学ぶ環境のUD化と、学習そのもののUD化に取り組んだ。ノイズの解消と書いたが、子供たちも気になることがそれぞれ異なり、例えば椅子を動かす時の音が非常に気になって勉強が手につかないなど、色々な特徴を持った子供たちがいるということを踏まえ、椅子にテニスボールを付けて、動かす時の音が出ないようにするなどに取り組んだ。
- ・ 二つ目は、指示の視覚化である。例えば掃除用具入れに何が入っているかという表示をしている学校が結構多いと思われるが、どのように片付けてほしいか分かるよう、サンプルとなる写真を貼って、文字情報だけで分からない子供達に、このように片付けて欲しいというイメージを、視覚で訴えるよう工夫をしている。
- ・ 三つ目は、学習についてである。一つ目の柱は焦点化。これは、極力シンプル化することと考えていただければと思う。それから視覚化。これは先ほどの掃除用具入れの話ともつながる。そして共有化。これは、子供たち同士で学んだことを共有することで、お互いの理解の違いを埋めるようなイメージを持ってもらおうとよいと思う。このような三つの柱を意識した授業づくりを1年目は行ってきた。
- ・ 昨年度の2年目は、さらに学習についてもっと踏み込んでいこうと、認知特性を踏まえた授業づくりに取り組んだ。子供たちには、物事を認知する時の得手・不得手があって、目で見るのが得意な人は視覚優位、聞いて覚えるのが得意な人は聴覚優位、言葉として捉えるのが得意だったら言語優位。また、勉強が頭に入ってくるその流れや処理の仕方もいくつかあり、一気に全体像が分かり同時に複数のことが処理できるとか、一つずつ順番でなければ頭に入らない経時的処理の方が得意な子など、色々な得手・不得手があることを踏まえ、極力色々な子供たちに伝わるような授業を展開していこうと工夫してきた。これが数学のテストなどで徐々に成果として現れてきている。さらに数学だけではなく、様々な場面で課題の提示にICTを使って視覚化を進めていこうとしたのが、去年までの取組である。

- これらを受けて、今年はさらに、認知特性を踏まえた授業づくりを頑張っていきたいと思っている。UD化には、教室環境のUD化と学習のUD化以外にもう一つ大事な柱があり、それが人的環境のUD化である。みんなで力を合わせるというイメージを持ってもらうといい。このように困ることを少しでも減らす工夫を、色々な側面から進めていきたい。はじめに、地区ごとでの取り組みが特徴だと話したが、コロナ禍でなかなか他の学校との協力体制を組めなかったので、今年こそは地域での広がりにつながる取り組みを、小中高と協力して進めていきたいと思っている。
- これらの取り組みに2ヶ月間、私自身が関わってみて、今思っていることを最後に話したい。共に学ぶ教育の「共に」とは誰と誰のことなのかを4月半ば頃からずっと考えている。障害のある人とない人という意味の「共に」が、この事業のスタートラインと思って取り組んでいるが、認知特性などを勉強していると特性は誰もが持っていることなので、障害の有無というよりも、もっと広く捉えていくこと、全員を対象を広げていくべき視点ではないかと考えている。勉強が不得意な生徒と勉強が得意な生徒が共に学ぶということにも、考え方を広げていきたいと思っている。これがうまくいけば、分からない生徒が安心して他の生徒に質問できるような時間をたくさん取れる。これが多様性を認めることや思いやり、自分の弱点も含めた自分らしさを大切にする部分につながっていくと思っている。
- 当然、今キーワードになっている「誰1人取り残さない」、「個別最適」、「対話的」というキーワードにもつながっていき、協働的な学びの保障にも最終的にはつながっていくものと思っている。「分からないことを分かりたいから学校に行きたい」と思えるような学校を作れたら嬉しいというのが、今の私の具体的な一つのゴール地点になっている。学力不振や、居場所がないことにより登校できない生徒への支援にも必ずつながっていくものと信じている。
- さらに、学びのづくり手、授業のづくり手として、生徒と生徒が共に学ぶとともに、生徒と教師も一緒に学ぶ。それから教師同士も、例えば異校種間の連携も含めて、教師同士も共に学ぶという広がりも考えられると思っている。また、学校だけで大丈夫か充分なのかという視点もあると思うので、学校と保護者、学校と地域が共に学ぶというスタンスも大事と考えている。これまでのようにPTAだけではなくて、コミュニティ・スクールなどの学校運営の協議会を作って、地域の皆さんと学校の運営に取り組んでいる、そういう地域がどんどん増えていると思うが、コミュニティ・スクールや部活動の地域移行も含めて、共に学ぶの「共に」がどんどん広がっている状況だと思っている。
- 県全体の教育活動の土台に、この「共に学ぶ」というキーワードが強く入って来てもいいのではないかと個人的に思う。この大事なキーワード、方向性が色々なところに生きてくると、それぞれが一つの視点で段々つながってくるので、シンプルに全体を捉えるための一つの手立てにもなると思っている。

【栗原市立金成小中学校学校運営協議会 会長 千葉 文彦 氏】 ※意見発表

- 栗原市立金成小中学校は、児童生徒の減少等により小中一貫校として2014年に開校した。以前は金成中と沢辺、金成、津久毛、萩野、萩野第二の五つの小学校があったが、各小学校はそれぞれ特色のあることをやっていた。例えば、沢辺小学校は、学校内に「校」の「園」と書いて校園があり、子供たちが休み時間になると山に消えて、チャイムがなると戻ってくる。津久毛小学校は、体力づくりに非常に力を入れていて、例えば寒くても水泳ができるよう保護者がお風呂を沸かし待っていてくれる。萩野第二は、一輪車に全校児童が乗れ、全日本一輪車大会に出ている一輪車の学校。金成小学校は、図書館がとても充実していた。萩野小学校は、歴史がある町なので、地域学習に力を入れていた。このように、すごく特色のあるところが一つの金成小中学校になって10年目となるが、歴代の校長先生方も大変苦勞されてきたようだ。その中で、コロナ等もあって学校を取り巻く問題の複雑化、困難化に、予測不能な今のこの社会で、地域全体で解決していこうと取り組んでいくことになった。
- 金成小中学校の学校運営委員会について説明すると、学校運営委員会は10名の地域の様々な方々が入っている。主な役割は、校長先生が提出した学校運営の基本方針に対する承認と、学校運営について教育委員会又は校長に、例えば、教育課程の編成に関すること、学校経営計画に関すること、地域との連携に関すること、予算管理及び執行に関すること、施設及び設備等の管理及び整備に関することなどについて、意見を述べることができると規定されている。
- コロナが流行ってなかなか活動できなかったが、昨年の後半から少しずつ活動するようになった。

実際にどういうことを行ったかということ、去年は学校運営方針や子供の様子を踏まえ、学校や地域の良さや課題、改善策について、校長先生、教頭先生、そして教員も入って協議会の委員とグループを作って協議をすることにした。課題について教育委員会、私たち委員、学校の中から三つ課題を出し、一つ目は、スマホ・ゲームに依存しないためにどうするかということ、二つ目は、地域の人々が参加しやすいふるさとの行事をどうするかということ、三つ目は、日常的に子供の体力・運動能力を育むためにどうするかということ話を話した。この三つのテーマを話すことになるが、だいたい2時間以内での話し合いなので、最後の結論までは出せない。

- なので、ふせんに良い点や継続して欲しいことを、赤いふせんには課題を改善するための取組について書いてもらう。そしてその中で、自分の考えについてのふせんを貼り、それをまとめて矢印で関係性を示しながら進めた。そして最後に、各グループから話し合いの内容を発表し、例えば、スマホ・ゲームに依存しないために、親子でスマホ・ゲームに関する講師を呼んで、話を聞くことができないかという提案があり、これは実現することができた。
- 二つ目の地域の人々が参加しやすいふるさと教育のあり方については、難しいところがあり、私と同じ年代の60代、70代の方は元気なので喜んで参加するが、休日に保護者世代の方々の参加が少ないという意見も出たことから、今後、色々なことを検討し実施していこうというところで終わった。
- 三つ目は、日常的に子どもの体力・運動能力を育むため、県で進めている大縄跳びをやってみるという話があった。しかし、金成の場合はスクールバス通学が基本で、本当に遊ぶ相手が近くにいない。なので、単縄跳びをもっと流行らせたらかどうかという話があった。それから、体力・運動能力テストのやり方が適切なのかという話も出た。例えば、ボール投げで1mという記録があった時に、「投げ方を教えていないのではないか」、「学校で体育の時間に教えるべきではないか」という話も出た。良いと思ったこととしては、中学校で「“金成中学校記録何回”など貼りだすことを、小学校でもやればいいのか」といった意見が出た。
- そのような中で、4月の協議会で校長先生から、「こういう話が昨年度あったので、こういうことを学校運営の中に取り入れた」という報告があった。素晴らしい校長先生だと思う。やはり、これからはそのようにしていく必要があるものと私自身は思っている。
- 現在、金成小中学校は1年生から9年生まで、一番少ない学年が1年生で30人、一番多いのは48人で、ここ何年かはあまり変わらなかった。ところが、今年生まれた旧金成町の子供は10人ほど。これからどうなるのかを見通してやっていかなければいけないという話になったが、何も具体的なものは無い。これから本当に田舎の人口がすごく減っていく。地域の方々からは、地域で子供の姿が見えないという声や、小中学校の親世代が地域の行事等に参加してくれないという声もあり、行事等を工夫して行く必要があると思う。
- 校長先生は隠さず色々なことを話してくれて、すごく信頼感がある。例えば、授業妨害が今色々な学校で起きているが、意外と委員が知らないことが多い。授業妨害の数を見て驚いたが、説明を聞くと、1回妨害すると1回、同じ時間に2回すると2回と、数名の子供が繰り返し行っているとのことである。そこで意見として出たのは、授業妨害をする子供と妨害をされた子供の両方の学びを保障していかなければいけないということ。つまり、妨害している子供たちにも様々な要因があるということを経験した校長先生はきちんと話してくれて、委員の方々も、学校が大変だということに理解を示した。
- そのほか、部活動についてもすごく心配している。部活動の地域移行と言われても、田舎の学校はできるのかという意見も出された。地域のスポーツ指導者も話に入っていたが、いったい誰がやるのかというのが本音だと思う。土日にスポーツ指導者がやるにしても、その時の保障がどのようになるのかなど、具体的には何も決まっていなかった。そういう部分をこれから詰めなければならなかった。
- 金成小中学校に何度も行くようになり、本当に先生方がよく頑張っていて、先生方を応援したいと思った。最近のニュースを見ると、教職員の不祥事だけがクローズアップされ、教師の仕事の素晴らしさについて伝えられることが少ないと感じる。私たちは、子供たちや地域の素晴らしさを地域に伝えるとともに、先生方の素晴らしさも伝えようと、委員の間で話している。
- 最後に、休んだり途中で退職したりする先生が増えてきていること、教員採用試験の倍率が低下していること、教員採用試験の日程を前倒しするなどのニュースが出ている。本当に教師という仕事に夢があり、若い人たちに選んでもらえる職業になることを私は期待しているし、夢を持って教員

になった人たちを、みんなで育てていこうという話をしている。

【特定非営利活動法人ルネッサンスファクトリー 理事長 菅原 一杉 氏】 ※意見発表

- ・ ルネッサンスファクトリーは、地域づくりや移住・交流といった活動をメインとしており、地域づくりの観点から学校や教育に関して意見を述べていく。
- ・ 当法人では、KAMIKUROという法人の所在する色麻町の上黒沢地区のみで流通している超ローカルマガジンを発行している。なぜこの狭い地域で流通するマガジンを作ったのかというと、イギリスにダンバーという学者がおり、その説によると健全な顔の見える関係が機能する人数は、だいたい100から250人であろうとされている。それを色麻町に当てはめると、だいたい一つの地域ぐらいの人数になり、上黒沢地区は82戸で人数272人なので、ちょうどダンバーの唱える数に近いことから、この地域で顔の見える関係を構築できるかどうか、一種の社会実験に近い取り組みであり、ここで活動をしている住民がどのような人なのか、そのことを住民同士がよく分かるためのツールとして、このKAMIKUROを発行している。
- ・ では、顔の見える関係が健全に機能する状態とは何かというと、私が考えるに、この国は民主主義なので何かを決める時は多数決で決めるが、その負けた少数派の方に思いやれるかどうかということだと思う。負けた側はこの先どうするのだろうかと思いやりを持てると、それは顔が見えているということになる。少数派の人をきちんと思いやれるかどうか、顔の見える関係が健全に機能するということだと思っている。
- ・ そういう顔の見える関係がもともと地域にはあった。みんなで草刈しようとか、道路掃除しようとか、そのように支える仕組みがあった。だが、その顔の見える関係が失われることによって、支え合いだったものがしがらみに変わってしまう。それが負担や苦痛に感じられてしまい、もうプレッシャーに耐えられず、「こんなところは嫌だ」と言って出て行って孤独を選んでしまう。でも、1人の方が楽で幸せというのは、傷つく経験があったがために生まれた誤認だと思っている。
- ・ 少し壮大な話になってしまうが、私たち人類の祖先のホモサピエンスという人種は、ほかのネアンデルタール人などに比べて体も小さいし、能力も低かった。しかし、なぜホモサピエンスだけが生き残ったのかというと、それは能力が低いがために自分の得意分野でお互いの不得意分野を補い合っただけで生き残ったからである。そのDNAが我々に残っているので、お互いを支え合うという状態を幸福だと感じる。人間の幸せは人それぞれだと言われるが、その共通したベースとして、孤独は幸福感の反対側にあるのではないかと思っている。前置きがだいぶ長くなってしまったが、そういった地域をつくっていかうと思っただけで広報誌づくりに取り組んでいる。
- ・ この間、岸田首相が襲われた事件があったが、最初に犯人を取り押さえたのは地元の漁師であった。なぜSPよりも早く反応できたかというと、あの辺りは住民間で顔の見える関係が成り立っている地域のため、見たことがない人だと思っただけでマークしていたらしく、その人物が何か物を投げたので、素早く取り押さえられた。つまり、顔の見える関係、コミュニティ力とも言っているが、それがあつた地域は安心して安全なまちづくりというのが実現できる。そういう地域に学校を巻き込みたい。
- ・ 上黒沢地区には加美農業高校があるが、一番身近にある学校なのに何が行われているか、その地域の人でもよくわかっていないようなので、広報誌で紹介することによって、今学校でこういうことが起きている、こういう子たちが通っているということを感じてもらい、加美農業高校のことを地域の人に知ってもらおう。地域の方は、地域に子供や若者が通ってくる、集まってくるのを見ていて、この地域の未来がこの先も続いていくという希望を与えてくれる存在として、歓迎していることは間違いない。ただ、その歓迎しているという、来てくれてありがとうという気持ちを子供たちに伝えたいと思っている。そこで、広報誌をつくって学校の壁に貼り出してもらうなどして使ってもらっている。
- ・ 地域の大人たちは子供のためには頑張るものであり、四国のとある離島に子ども食堂があるのだが、その島には子供が3人しかいないのに、スタッフとして高齢者が30人ぐらいいる。それは、子ども食堂ではなく、地域食堂ではないのかと言われているのだが、高齢者の孤食を防ぐためにみんなで一緒に食べる会を開かないかと呼びかけたところ、自分は見守られる年じゃないと言われ断られたそう。だが、子ども食堂として、子供のためにみんなでご飯を作らないかと言ったら、子供のためなら仕方ないとなる。大人というのは、やはり子供や若者のために動こうとする意欲を持っている。

- 学校が地域にあるということは、その学校を軸にしてコミュニティが生まれ、そのコミュニティがあることが意欲となってどんどん回っていく。しかし、人数が少なくなって学校を統廃合してしまう、地元から学校がなくなるというのは、とても悲しいことで、個人的にはやめてほしいと思っている。そこには様々な事情があると思うのでこれ以上言及しないが、そのようなコミュニティの中心となる力が学校にはあるので、学校と地域が連携できる関係が必要になってくると思っている。
- 地域と触れ合うことによって、親と先生以外の大人と若い生徒たちが交流する。そうすると、「こういう大人もいるんだな」、「こういう仕事している人もいるんだな」という価値観の幅が生まれ、そのことによって多様性を感じられる。多様性を感じられるというのは、孤独・孤立の防止につながる。存在を知らないうちは全く理解できなかった人同士が触れ合い、お互い顔の見える関係になることによって、「こういう生き方もあるんだな」、「こういう働き方もあるんだな」と共感を得るようになる。
- 私自身は、教育のICT化やDX化は推進派だが、かといって、ICTやDXですべて教育がオールオーケー、先生全員AIになればいいのかという話になると、それは違うのではないかと思う。ICT化は、学習を情報にしてしまった。本当は、学びは体験だったと思っており、「寒い石油ストーブの匂いがするところで先生がこう言っていたな」と、そういう体験込みで学力が身につくと思うのだが、読めればいい、見ればいい、分かればいいというような感じになると、知識だけ、情報だけになってしまう。
- 体験がないと、普段の学力も下がるというデータもあると聞く。例えば、現代文の文章で「氷の張ったバケツの水に手を浸すと、痛むような冷たさを感じた」というような文章があったとする。氷の張っている水を触ったことがない人は、なぜ冷たいが痛いになるのかが感じられないため、文章を読んでも感動できず、読解力も落ちる。読解力が落ちると共感できないし興味も湧かないので、だんだん学力が下がってしまう。そういう効果もあると聞いている。ICTによる情報格差というのは埋められると思うが、学力格差も埋められるかということ、私は若干疑問が残る。
- だが、やはり先生の人口も減っていくし、働き手の人口も減っていくので、そのような時に支えになるのは地域の人なのではないか。地域の人が学校に協力できるようになるためには、普段から良い関係を学校と地域が結んでおくことがとても大事。
- この広報誌KAMIKUROでも、毎月校長先生から記事のネタを提供してもらえる関係をつくることができた。地域の人にも、行事などについて情報提供もしている。それで少しずつ協力し合って、こういう先生が働いている、こういう生徒がいるということが上黒沢の住民に少しずつ浸透し始めている。これもまだ始まったばかりなので、これからどういった取組を学校と地域と連携して進めていくか、今からワクワクしているところ。以上、地域づくりの観点から学校を考える意見を述べさせていただいた。

【キョーユー株式会社 代表取締役副社長 境 弘志 氏】 ※意見発表

- 民間企業の代表というより、私たちの企業の代表ということで、意見を述べていきたいと思う。当社の紹介について、詳しくはホームページをご覧頂ければと思うが、会長の安保と代表の畑中の2名で立ち上がり、今年で49年目。簡単に言うと金属部品を作る工場会社で、グループ会社の4つに分かれ、総勢で300人ぐらいのメンバーで作業している。
- 工場内の様子は、部品製造の会社であるが、24時間365日温度管理をしている。社員のためというよりも、工作機械は温度変化を嫌うことから空調をかけている。夏涼しく冬暖かいということは、結果的に我々社員も良い環境で働いているという状況になっている。
- 我々は、東日本大震災、リーマンショックの後に、人づくりにすごく力を入れてきた。人材育成という言葉があるが、人材は材料の材ではなく財産の財という漢字を使いながら、人の教育をなんとかしていこうとしている。ただ、我々は民間企業なので、費用には限界があることから、我々の会社でできる範囲の人財育成を考えている状況。
- 我々の会社も工業系の生徒が欲しいのだが、この地域には古川工業高校と石巻工業高校の2校しか実際はない。石巻工業高校に関しては、機械科が減っている現状から、なかなか工業系からの採用が難しい現実があり、新入社員に関しては半分ぐらいが普通科出身となっている。どうしようかという社長の思いで、技能検定の取得促進を震災前から続けている。普通科出身は工業系のことを一切分からないので、技能検定を受けることによって学科と実務の両方を学べるため続け

- ている。新入社員は、おかげさまで今年も10名ほど採用できた。たった1名だが先生役になってもらい、2ヶ月間社内実習をみっちり行い6月から現場に入るという状況になっている。また、コロナの間はなかなか外部研修がなかったが、北部地方振興事務所の協力をもらって、色々な中小企業の新入社員が集まる勉強会に我々も積極的に参加させてもらい、教育の一環になっている。
- ・ 去年から技能オリンピックにチャレンジしている。昨年度、県工業高校から入社した社員が、今回は山形で実施された試験について、参加することに意味があるということでチャレンジした。このように、人財育成を何とかしようという考えを持って、会社を運営している状況である。
 - ・ よく言われることは、ものを創る前に人をつくるということで、社長の強い思いを持って進めている。私が入社した平成3年頃は、このような人財育成という言葉はなかったので、本当に見て覚える世界で育ってきたが、時代が変わり今はこういったことに取り組んでいる状況。
 - ・ 採用難は、我々民間企業にとってかなり重要な問題になっている。給料をしっかりと支払いつつ、福利厚生にも力を入れながらやっている。我々は300人規模で働く場所が複数工場に分かれていることから、会わない社員とは1ヶ月間も会わないこともあるため、最低年2回はみんなで集まって、古い言葉だと飲みニケーションのような活動をしているほか、様々なレクリエーションも色々進めている。一部は会社の非公認ではあるが、一部の社員で会ったり、ヨガサークルだったり、ゴルフをかじったりと、仕事以外でも集まるようにしようと、取組を継続している。
 - ・ 働きやすい環境づくりということで、我々の本社は100名だが女性が3割いる。育児休暇に関しては100%取得を目指していて、この数年間は100%取得で必ず会社に戻ってこられる状況を作っている。まだまだ実績は少ないのだが、男性の育休も実績を積むようにしている。男性の育休は現場を持っているのでなかなか大変なのだが、今社員一丸となって取り組んでいるところ。
 - ・ 地域に根差すということで、産学官連携の活動もしており、美里町の地区の行政区長と連携しながら、会社を避難所として解放することや、雇用創出ということで、加美農業高校から石巻方面、岩手方面まで赴いている。また、地域住民とのコミュニケーションを取るということで、地域の小学生の工場見学にも対応している。
 - ・ ここからは、我々民間の会社としての希望を述べていく。我々の企業も48年が経って、私もこの十数年、採用活動や社員教育を行っているが、先ほど話があったAI、IoT、DX、ICTなどについて、私が高校の頃はパソコンも学校にほぼなく、自分の当時の記憶では、パソコンの授業が1時間しか記憶にない。それが、時代とともにパソコンを使った話になってくると、やはり一定数の学力というのが必要だろうと強く思っている。
 - ・ どうしても、製造業全体の就職希望の生徒が減ってきていることをひしひしと感じており、我々も大崎地域よりは宮城県全体、あとは岩手にも赴いている。採用するに当たり、相手となるのは地域の大手メーカー。その採用活動には、福利厚生も含めて色々な取組があり、特に岩手は新卒の採用活動を県がらみでしている話もあり、遠方からの採用に関しては、一定数の距離の制約はあるものの、住宅補助というのを作っている。
 - ・ インターンシップは希望があればすべて対応しているが、なかなか流出が止まらない。そのために、やはり我々民間も汗をかく必要があると思っている。ただし、県外流出や大手志向、給料格差というのは、残念ながら現実として我々も感じており、中小企業の衰退が懸念されている。
 - ・ デジタル人材に関しては、働く場所を選ばないというような状況になってきている。我々中小企業としては、義務教育課程からパソコンを使う能力を教えて欲しいと思っている。簡単に言うとエクセルやワードなどは、その会社業務を進める上ではかなり重要な技能なので、これを会社に来てから教えるとなると、なかなかうまく進まないというような状況になっている。
 - ・ 昔は力を持った先輩がいて、部下は先輩の背中を見て育った時代だったが、今は、我々の近くにハローワークも労働基準監督署もあって、色々情報共有しながら、今の労働環境、労働育成、社内教育を考え指導を受けながら進めている状況。上司が部下を気使うことはもちろん、社内育成もしっかりやっている。採用した生徒のメンタルケアが難しく、面接試験でなかなか適正を見抜くことができず、面接時と就職後の態度が違っている生徒もいる。我々自身はメンタルヘルスに関する対応術を持っていないので、そのようなケースが生じた場合は色々な方に相談して、どのように対応するべきか、かなり悩みながら進めている。
 - ・ 我が企業は来年50周年を迎えるが、これから100年を迎えるに当たり、人財が大事だと考えている。そのような意味で、採用する時に、学校側や生徒側に対してはもちろん、特に保護者の方々への会社アピールについて、我々中小企業でなかなか大手企業のような知名度がないことか

ら、知名度をどう高めればいいのか一生懸命に考えている。ぜひ、皆様からもよいアイデアがあれば教えていただければと思う。

—意見交換—

【佐々木副教育長】

- ・ 小野寺校長先生からめんこい子供たち丁寧に寄り添っていくというご発言があった。高校生からは、先生に寄り添ってもらって、夢の実現のために、自分が何をしなければならないのかが分かっているから頑張れるという話もあった。また、日野口校長先生からは、共に学ぶというところで、これもまさに子供たちに学校がどう寄り添っていくのかということであったと思う。千葉様や菅原様も地域の中でどうやって学校に寄り添っていくのかということ、境様からは、卒業した子供たちにどう寄り添いながら人を育てていくのかというお話があった。この「寄り添う」といったところを一つのキーワードとした時に、それぞれの立場から、何が今大事かお聞かせ頂ければと思う。

【加美町立鳴峰中学校 校長 小野寺 英一 氏】

- ・ 寄り添うということ考えた時に、目の前の子供の姿からだけでは見えないことがあり、家庭で何かあったのか、友達関係で何かあったのか、そういうところも含めて、こちら側が理解するという寄り添い方。それから、その子の可能性や伸びしろがどこまであり、どこが伸びていくかを見極めるための寄り添い方。そのような寄り添い方を理解していくことが非常に大事だと思う。あまり無理を強いると逆効果になることを踏まえながら、寄り添っていきたいと思っている。

【佐々木副教育長】

- ・ 一番近くにいる教員が色々なネットワークを使いながら、その子の姿を立体的に見ていくということなのだと思う。大和田さんから、個性を認めてくれて、そして将来のことを中長期的な見通しを示してもらえる先生がいてくれたという発言があり、また宍戸さんからは、先生から学ぶ中で、夢を実現するために友達とのコミュニケーションが大事であること、それから、学ぶことと社会のつながりを実感できたという発言があったが、教員としての在り様について、他にご意見を伺えればと思う。

【大崎市立松山中学校 校長 日野口 香 氏】

- ・ 寄り添うということについて、みんな同じではないことを前提に考えるべきと思う。よく、励ましているつもりで「俺だってできた。だから君だってできるよ」と言うが、実はそのようなはずはない。では、誰でも大谷翔平選手みたいになれるのかという話になってくるので、やはりできること、できないことを認め合って、お互いが支え合うという気持ちや、発達障害やLGBTなど色々な問題もあるので、それも全部個性として受け止めて、この子はこれができるし、この子はこれができるから一緒にやらせてみるという、いわゆるグラデーションで人を見る目を持つべきだと思う。

【佐々木副教育長】

- ・ おそらく、それは教員だけではなく、子供たちもそのような見方ができるようにしていかなければならないのだろうなと思った。もう一つ大事なキーワードとして、学びの在り方というものもあったと思っており、そのスキルや知識の習得が何のためにするのか分からなかったから、なんとなく授業を受けていたという話があった。
- ・ その一方で、最低限の基礎学力は保障していかなければならず、共に学ぶというところで多様性を享受しながら学力を保障するという話もあった。今日、それぞれの立場からお話を頂戴したが、寄り添っていくこと、それから学びの在り方ということについて、個人的に色々考えさせていただいた。

(3) 石巻・登米圏域

日 時：令和5年6月9日（金）午後6時から午後7時45分まで

場 所：石巻合同庁舎 1階 大会議室（石巻市あゆみ野5丁目7番地）

出席者：別紙参照

<発言要旨>

【石巻市立蛇田中学校 3年 阿部 建虎 さん】 ※意見発表

- ・ 私は、今の学校生活には満足している。授業では知らないことに対する考え方を学べ、部活ではチームとしての在り方や種目を上達させるための指導をしてもらえるほか、社会のルールや礼儀など得られるものがある。日々新しいものへ挑戦することが楽しく、それらが私を豊かにしてくれると思う。つまりくことも多々あるが、周囲にいてくれる人たちは相談すれば必ず解決に向けて手助けをしてくれる。
- ・ 蛇田中学校の今年の生徒会テーマは、「主役 自分だけの物語を作ろう」。これは、生徒一人一人が輝けるようなテーマであり、全生徒の投票で決めたことから、全校生徒の個性を尊重していこうとする姿勢を感じ取ることができる。このテーマのもと、これからも生徒が主体となって、より良い学校へと変化して行くことができると思う。
- ・ その一つとして、生徒心得を考える会がある。蛇田中学校では、校則を生徒心得と呼んでおり、タブレット端末を活用して全校生徒にアンケートを取り、話し合ったり先生方に話を聞いていただいたりしながら、今まで靴下や髪型のルールを変えてきた。自分たちで決めたルールだからこそ、守ろうという意識が高まっていると思う。私も生徒会長として、さらに全校生徒が満足できるような取り組みと環境を作っていきたい。
- ・ 今回、改めて第二期宮城県教育振興基本計画素案を読んだ際に、必要とされる能力を生徒同士で高めていくために、生徒会執行部が中心になって生徒が一体となって取り組める新たな行事を作りたいと思った。そして、呼びかけやポスター制作など、さまざまな活動を積極的に行っていきたいと思う。また、委員会を中心としたボランティア活動も積極的に行っていきたい。
- ・ 今後、行われれば良いと考えるのは、スポーツクラブの設立。誰でもどこの学校でも、様々な仲間と指導者からスポーツを学び楽しめる環境があれば、地域で競技力向上ができると思う。私の所属する陸上競技部では、現在仙台まで行って大会をしている。近くに多目的で使える陸上競技場があれば、石巻の陸上レベルがもっと上がると思う。

【宮城県石巻高等学校 2年 佐藤 颯 さん】 ※意見発表

- ・ 高校生活を送る中で感じた、教育に対しての疑問と自分なりの答えを話したい。
- ・ 一つ目が、自分たちの代から始まった新しい新課程の評価についてである。新課程のうち、「主体的に学ぶ態度」について、もう少し具体化した方が良いのではないかと感じる。数回の考査の評価を通じて思うのは、やはり先生によって判断基準が違うのではないかとということである。石巻高校では、「主体性」とは自分の学習状況やテストの点数など自己分析をして、次の学習につなげることとなっているが、他の人と評価を比べると、同じ内容でも評価が違っていたりする点があると思った。
- ・ 二つ目が、先生によって授業内容が異なる点である。先生の個性があるのは素晴らしいことだと思うが、クラスによって教えることに違いがあると、学力の差が出てしまう問題がある。実際に他のクラスの授業を比べてみると、入試に出る部分や頻出単語を教えてくれる先生がいたり、他のクラスでは豆知識や将来に役立つ情報を教えてくれる先生がいたりする。そこで、ICTを活用してグーグルフォームなどで、授業であったことをクラス全員で共有したりすることができれば、学力やモチベーションの向上にも繋がると思う。
- ・ 三点目に、アクティブラーニングについてである。私が高校生になって最初に感じたのは、グループワークやペアワークが増えたということである。しかし、実際に授業をしていると、次第に個人で取り組む人が増えていると感じた。グループワークは生徒同士のコミュニケーションや課題に対するアプローチなど、社会性の成長などにもつながる大事なものであり、もう少し推進した方が良いと思う。
- ・ 最後に、授業の形態についてである。授業の形態には、講義型、個別型、対話型などの型があり、

教科によって合っている形態があると考え。生徒が主体となって授業形態を考え、先生がアドバイザーとして協力するとよいと考える。

【石巻市立湊小学校 校長 久保田 健一 氏】 ※意見発表

- ・ 湊小学校は明治6年6月3日に開校し、今年で150周年となる。現在児童数は132名、各学年1クラスの編成である。
- ・ 教育振興基本計画について、学校の立場として関係するところに絞って発表させていただく。まず、基本方向1「豊かな人間性と社会性の育成」についてである。新型コロナウイルスが蔓延し、ここ4年間はマスク越しの生活や話し合い活動の減少で、人間性・社会性がなかなか育ちにくい状況にある。5類に移行したことで、授業やソーシャルスキルトレーニングなどを通して、学級で安心して楽しく学べる環境になるよう、子供同士、子供と教師、大人同士の関係づくりを積極的に行う必要がある。
- ・ 次に、基本方針2「健やかな体の育成」についてである。宮城県体力テストの結果では、体力合計点は平成30年からコロナの影響で顕著に下がってきている。また、小中学生ともに肥満傾向の割合が全国値を上回っている。これはコロナの影響もあると思うが、震災後、外で体を動かして遊ぶ事が減少していることや、遊ぶ場所がなくなったり、不審者等の心配があったりと、環境的なところもあると思う。そこで学校では、体育の授業や外遊びの時間で体を動かす機会を確保することを継続するとともに、50メートル走、ソフトボール投げなどの技術が必要な種目については、授業の中で向上を図っていく必要がある。また、肥満傾向の改善については、食育の学習も大切であり、家庭の協力が必要不可欠。学校と家庭が連携した基本的な生活習慣の改善に向けた取り組みをしていかなければならない。
- ・ 次に、基本方向3「確かな学力の育成」についてである。石巻市、登米市、東松島市も県と同様、学力は特に算数が全国平均に到達しておらず、基礎基本を活用し応用への対策を取っていく必要がある。また、読解力を身につけさせることで応用力も身につけることができると考えられるため、読書の習慣をつけさせる必要があると思う。さらに、主体的・対話的で深い学びを実践するために、協同学習や学び合い学習を実践しているが、子供たちが分かる喜びに達するまでにはもう少しという状況。
- ・ 次に、基本方向8「学びの保障と教育機会の確保」についてである。家庭でも安心して生活できる環境が必要。環境が安定することで家庭の教育力が上がり、学校と連携しやすくなると思う。そのためには、家庭の貧困問題などにも何か手を差し伸べていただければと思う。学校ではそこまでなかなかできず、色々な機関の助けが必要。教育環境が充実し、安心して学習に取り組めることができれば、確かな学力に向かうことができるだろうと思う。
- ・ 次に、基本方向9「安心して楽しく学べる教育環境づくり」についてである。教員の資質能力の総合的な向上が大切。資質を備えた教員を配置し、さらに欠員が無いような状況にあってほしい。
- ・ 次に、これからの教育についてである。まずは、教育デジタルトランスフォーメーション。これからの教育において、最新のデジタルテクノロジーを活用することで、教育の手法や手段、教職員の業務などを変化させて欲しい。現在の子供たちが社会に出てから、仕事や暮らしの中で、従来とまた違った知識やスキルが求められるだろう。ただし、デジタルに頼ることが一番ではなく、必要な時にデジタルを使いこなすことができるスキルを持つことが大切。また、働き方改革にもデジタルが力を発揮すると思う。教員自身、デジタルを道具として使いこなせるようにならなければならない。
- ・ 次に、モデルになる大人になることについて。学校は豊かな人間性や社会性を育成し、将来の夢や志を持たせる。ただ、子供に将来の夢を持たせるということは簡単ではなく、身近な大人がモデルになると、夢を持ちやすくなると思う。そのためには家庭、地域にモデルとなる大人が増えていく必要がある。
- ・ 最後に、脱ブラックについてである。教員はとても真面目で、やればやっただけ仕事が増えていくのに、さらにきめ細やかな対応を求められる。家庭や地域、学校がうまく連携できることで、教育が進むことがたくさんあると思う。子供はもちろん、家庭、地域、学校が楽しく学んだり、楽しく体を動かしたり、楽しく活動することが理想。そのためにも、それぞれのできることを確認し、認め合いながら教育を進めていくことができればと思う。そして、脱ブラックにより、教員になりたい若者がどんどん増え、将来有望な人材も集まることで良い循環が生まれると思う。

【登米市立南方幼稚園 園長 星 良 氏】 ※意見発表

- ・ 今の子供たちの様子を見ると、コロナ禍であったこともあり、友達をはじめとした人との関わりが大変薄くなっているように感じる。幼児たちの遊びを大切にしなければならないと思っている。特に、外遊びの時間をしっかり確保することが重要である。外で遊ぶことは、体を十分に動かすことができ、気分も良くなるほか、子供たちが考えたり工夫したりしながら思いっきり楽しむことができる。そして友達とたくさん関わるができる場でもある。外遊びの十分な時間の保障を今後も大事にしていきたい。
- ・ 遊びを楽しむためには、子供たちが基本的な生活習慣をしっかり身につけていることも必要である。身支度や遊びの準備に時間がかかったり、体のリズムが整っておらず、十分に遊びや活動を楽しむことができなかつたりする子供が目につく。生活習慣はすぐに身につくものではなく、定着させるためには習慣化が必要だと思われる。幼稚園では自分の持ち物の始末や身支度、当番活動等、様々な機会を利用しながら、繰り返し子供たちに働きかけを行っている。このことについては、家庭も連携して生活のリズムを整えていく必要がある。家庭に幼稚園での子供の姿を伝えたり、早寝早起き朝ごはんの事業を啓発したりするなど、共に取り組んでいくことで効果があると考える。
- ・ 幼稚園と家庭のみならず、施設の枠を超え、地域で取り組んでいる事例をお話させていただく。登米市南方地区では、地区内の幼稚園、三つの小学校、中学校が連携し、メディアとの上手な関わり方を考える取組を行っている。すべての施設が共通の項目で取り組むので、家庭内でも兄弟間など一緒に取り組んでいる。地区内の園長、各小中学校、教育事務所長で構成される所属長会議でも中心的な話題となっており、発達の違いによる姿や良い事例、共通の課題など具体的に共有することができている。地域全体で取り組むことは、方向性が一貫し、点から面への広がりを生むようになる。幼稚園としても、小学校との連携がしやすくなり、先生同士の交流にもつながっている。
- ・ 隣接する南方小学校とは、小学校の行事の見学や共同の避難訓練を行っている。本年度は、平日に、小学校の校庭を借りて運動会を開催する予定であり、日常的な連携体制がさらにとれるようにしていきたい。
- ・ 私たちは、幼児を中心と捉え、適した子育てをしていかなければならない。また、様々な関係機関と情報交換などを行いながら顔なじみになり、育ちと学びの連続性を見据えて子育てをしていきたい。みんなで手を携え、同じ思いで関わっていくことは幼児だけではなく、子供たちみんなが健全に育っていくことに繋がると考える。
- ・ 最後に基本計画素案の基本方向4「幼児教育の充実」について、一言お話をさせていただきたく。学ぶ土台づくりを始め、取り組み内容がしっかりと示されていると思われる。当園でも本年、学ぶ土台づくりとして親の学び研修会を開催する予定になっており、十分に活用していきたい。
- ・ 1点、提言がある。項目の中に「幼・保・小の連携」とあるが、子ども園が増加していることから、これを「幼・保・子・小の連携」としてはいかがか。御一考いただきたい。

【東松島市PTA連合会 会長 松谷 多加子 氏】 ※意見発表

- ・ 本日はPTA関係者という立場での参加であるが、仕事で幼児教育に携わっていることもあり、その視点からの意見も含まれることをご了承いただきたい。
- ・ 教育現場で大切にされている基本計画が、どこまで家庭に届いているのだろうかという疑問を感じている。私は公立幼稚園に異動になったことで、基本計画の重要性を知ったが、それまでは基本計画に触れる機会がなく、このような計画の下で教育活動が行われていることを知らずに過ごしていた。今回、中間見直しということで、資料を拝見し、「多様性」「持続的」という言葉が印象深く残った。新たに加えられた「横断的視点」についても、自分らしく学び、一人一人の可能性を広げる教育というところにつながると読み取った。
- ・ 幼児教育の場でも、すぐに結果を求める、周りと比べてしまい過剰な焦りを覚えるといった保護者の悩みが多くなっているように感じる。そのために子育てが楽しめなかつたり、受け止められなかつたりしているところも多いように思う。長い目で見て、小さな頑張りや成長も喜び合い、持続的に支えていける教育現場になれば、子供たち一人一人の生きやすさも変わってくるのではないかと思う。
- ・ 私は現在、公立保育所に勤務しているが、年長児を担当することが多く、スタートカリキュラ

ム、アプローチカリキュラムについても考えさせられることが多々ある。そこで一番の課題と感じているのが、家庭との連携である。私たち保育者は、基礎となる5領域や、幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿などを意識して保育活動に取り組んだり、働きかけたりしているが、保護者の意識の向上や家庭での取り組みなしではなかなか成長につなげることができない。

- また、我が子が通う矢本二中では、デジタルメディアコントロール、通称「でめこん」に力を入れ、メディアを使用する時間をコントロールしようという活動に取り組んでいる。先生方が働きかけてくれるが、実際に取り組むのは生徒本人であり、家庭である。責任転嫁せず、強い意志で行動できる子の育成につながっていくものであると思う一方、そこにも保護者の意識、取り組みが重要になってくるのではないかと感じている。成長するにつれて自分の行動に責任が持てるよう、幼少期から自分で選ぶ、考える、判断する力の基礎を育てていかなければならない。
- また、自分らしさをのびのびと表現できる。友達のありのままを受け入れられるといったところも現場だけでなく、家庭でも意識して育てていけるような社会の動きが必要なのではないかと考える。
- 近年の教育や学習の様子を見てみると、子供たちが主体的に活動している場面がとても多く、以前と変わってきているように感じる。先日行われた矢本二中の体育祭では、進行や挨拶、表彰までも生徒が行い、先生方のさりげないバックアップのもと立派に勤め上げていた。どんなに、小さな役割でも責任を持って果たすことで、自己有用感を覚え、大きな自信につながっていくのだと感じた。
- 我が子は学習には消極的だが、部活動や委員会活動には熱心に取り組む、毎日張り切って学校に通っている。親としては、自分らしく打ち込めるものを見つけ、楽しく学校に通っていることに嬉しく思う。「その人らしい学び」というキーワードにはたくさんの意味があると思うが、多様な生き方を柔軟に受け入れ、学びにつなげようと努力してくれている先生方には感謝しかない。
- 学習や生活の中でうまくいくことばかりでなく、悩んだり落ち込んだりすることがあって当然だということも、小さな頃から培っていく必要があると感じる。思いどおりに物事が進まなかったり、挫折したりしたときに自分で気持ちを切り替えたり、自分から誰かを頼ったりすることが苦手な子が増えているように思う。できないことがあってもいい、苦手なことがあっても当然、ということがわかると、さまざまなことをプラスに捉えることができる。保育をする中でも気になる子、特別な配慮が必要なお子さんは年々増えているが、一人一人の個性をプラスに捉え、その子らしく笑顔で過ごして欲しいと強く思う。
- 長期間にわたった新型コロナウイルス感染症による経験不足等も充分考慮しながら、慎重に進めていく必要があることも今後の課題である。何よりも自分の命、他人の命を大切にできる人間性の育成が最も重要な根となるところになってくるのかと思う。宮城県の教育が新しい基本計画を基盤とし、さらに充実していることを願う。

【特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク 代表 伊勢 みゆき 氏】 ※意見発表

- NPO法人として教育に関わり、16年を迎える。学校教育の支援を中心に、キャリア教育や志教育、震災後は沿岸部での防災教育などに関わっているほか、社会教育の分野では公民館や自治体の研修会、コミュニティ・スクール、地域協働活動等にも携わらせてもらっている。
- 震災から十数年が経つが、学校教育では志教育で社会的自立を掲げて取り組んでいる一方で、現場に入るほど自立が難しい、課題を抱えた若者たちの声を聞くことが多くなった。その中で、昨年、石巻の中心部に「しゅろハウス」という若者、高校生の居場所づくりを始めた。
- 普段から現場で様々な方からの意見を聞いている中で、基本計画への意見を申し上げると、一言で言うと宮城県は「教育残念県」であるということ。もちろん、現場で先生や行政の方、お家の方が何とかしたいと尽力されてやっていることを踏まえても、様々な課題の連鎖が宮城県で起きており、この連鎖をどう断ち切っていくのかということが大人に課されている課題である。どんな子供・人を育てたいのか、基本計画にも掲げられているが、本当に大切なことは何なのか。限られた税金をどこに投入していくのかを真剣に考えなければならない。
- 「社会を生き抜く人づくり」とあるが、学校教育では学力の捉え方が認知能力に偏っていると感じる。非認知能力としての「学ぶ力」、社会で生きぬく力をもっと重要視し、育てるべき資質能力を見直すべきと考える。これまでキャリア教育、志教育に力を入れてきた学校では、多様な大人に会い、体験を繰り返すことで最終的に学力が上がるという結果を見てきている。であるならば、実

社会をもう少し教育の中にリンクさせていく学びが必要ではないか。今、全国的にも実業高校の統合や廃止の動きがあるが、こういう学校の重要性をもう一度認識すべきではないか。また、小学生段階からの体験学習とうまくつないでいけたら良いのではないかと考える。

- ・ 目標4「県民総ぐるみで支える宮城の教育」、学校・家庭・地域の連携とあるが、今の基本計画は学校教育に偏重しすぎていると感じる。疲弊している学校現場を支えるため、さらに社会教育の充実を図っていただくことが必要である。学校や地域をつなぐ機動力のある民間人材を育て、配置していくことで、動き出している地域もある。そのような仕組みを作るために学びの中間支援組織、コンソーシアムの設立を要望する。他県でも教育委員会の主導で財団法人を立ち上げて連携する仕組みを作っている。そういった連携協働体制づくり、組織改編を図ることが必要。また、佐賀県では県でふるさと納税を導入し、教育団体の活動を支援している。宮城県も「教育幸福県」に向けて、学校教育のその先を考えてほしい。
- ・ 最後に私が石巻で活動している「しゅろハウス」についてご紹介させていただく。ようやく一年が経ち、年間で高校生は延べ140名、若者は382名ほど来ている。集まる子供たちは、様々な課題を複合的に抱えており、相談機関に辿り着けない制度の狭間に置かれている子供たちである。多くは家庭不全を起こしており、大人との信頼関係が築けていない。その中で、みんなでご飯を作って食べることで団らんを体験し、安心して誰かに相談できるような場を、多くの方の寄付と善意でつくっている。子供たちからは、震災との向き合い方を考えたり、石巻に恩返しをしたいといった声が聞こえるようになった。そんな子供たちを育てるために、教育を通して幸せを実感できる宮城県になればと思う。

【株式会社鮮冷 代表取締役社長 石森 洋悦 氏】 ※意見発表

- ・ 本日、企業としての意見と自分の思い、二つの意見を用意してきたが、他の発表者の話を聞き、自分の思いを述べさせていただきたいと思う。
- ・ 女川町には、「女川は流されたのではない。新しい女川に生まれ変わるんだ」という震災当時の小学生による横断幕がある。また、中学生による命の石碑が町内20数か所に設置されており、大人たちの背中を押している。これらの背景には、素晴らしい先生方がいたことを忘れてはいけない。
- ・ 50年以上前の話になるが、私は女川中学校を卒業し、石巻高校に進学した。当時中学校の同学年から進学校に進んだ50名のうち、自身を含む30名が女川第一小学校3年2組の出身だった。どうしてこれだけの人数が難関校へ進んだのかと考えたとき、3年2組の担任の先生が素晴らしかったことを思い出した。当時はとても厳しい先生であったが、時代を経ても変わらない生徒想いの先生だった。そのエピソードを紹介したい。
- ・ あるとき、先生から生徒一人一人に手紙と称した課題が渡され、内容を暗記するように言われた。内容は全員異なり、授業とは関係のない、マラソンの由来や国名など、小学3年生には難しい専門的な雑学のようなものであったが、その知識がクラス全員を博士にしてくれた。一人一人に課題を与え、学ぶ楽しさを教えてくれた先生の情熱に感謝している。
- ・ 第2期教育振興基本計画概要版を読み、内容は素晴らしいと感じたが、計画の推進にあたって先生の負担がますます増えていくことが推測された。変化が速く、技術革新が進む中で、先生は生徒一人一人に寄り添った授業ができるのか心配に感じた。また、生徒や家庭、そして社会全体が以前ほど先生方をリスペクトしているのか疑問に思った。
- ・ 計画の推進に向けた在り方の中で、PDCAという言葉が出てくる。俗にいう意味ではなく、それを実行するための一人一人のPDCAを持つことが大切。教育という観点で私が考えたのは、P (Passion: 情熱)、D (Dream: 夢・志)、C (Chance: 機会)、A (Appreciate: 感謝) である。計画を作るだけでなく、情熱をもって進め、夢や志を持って実現に向かっていく。そしてチャンスやきっかけを察知する感性を身につけること、そして感謝の気持ちを忘れずにみんなで回していくということが重要ではないか。
- ・ 最後に、恩師からいただいた私の人生が変わった瞬間の話である。1 + 2 + 3 + … + 10の解を求められたとき、答えだけでなく、この足し算の法則を考えさせられた。それを自分なりに見つけたとき、算数の面白さに気づき、勉強が好きになった。そんな体験を子供たちにしてもらえよう、先生方にはお願いしたい。

【佐藤副教育長】

- ・ 最初の阿部さんのお話では、生徒が主体となるような学校にしたいという話があり、生徒会を中心に色々なことを進めていくことについて紹介いただいた。佐藤さんからは、授業の形態について、先生と生徒と一緒に決めていきたいという話があり、主体的な学びがこれからは大事なのだと感じた。そういった主体的な学び、主体的に考えるということを進めていくために必要なことについて、ご意見があればお願いしたい。

【株式会社鮮冷 代表取締役社長 石森 洋悦 氏】

- ・ 主体的に学ぶために、勉強と学びを二つに分けて考える必要がある。勉強は強制させられるものであり、好きな子は基本いないものであるが、学びは自ら作り、深掘りしていく楽しいものである。子供たちを自ら学ぶというところに向かわせるために、先生方にはその生徒の個性に合わせたきっかけづくりをしてもらいたい。
- ・ 佐藤君が述べたグループワークに関しては、やり方をよく考えないと、グループ内で発言できる子の意見に集約されるという危うさもある。ただ協働活動をすればよいのではなく、全員が主体性を持って取り組めるような形を目指していただきたい。

【特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク代表 伊勢 みゆき 氏】

- ・ 主体的な人間を育てるために、これから必要なスキルはファシリテーション力にあると感じる。文科大臣からも学校長に必要なスキルという発言もあった。一人一人が主体的に社会に参画するため、話し合いに必要なスキルアップを図る必要がある。
- ・ もう一つは、学習者との信頼関係を築くこと。ファシリテートする側の意図的なコントロールが働くと相手の主体性を奪うことにつながる。課題を抱える子供たち、若者たちというのは、人から信頼されてきた経験というのが少ないように感じる。主体性を築くために、まずは相手を承認することを、我々大人も含めてきちんとしていくことが大事である。

【石巻市立湊小学校 校長 久保田 健一 氏】

- ・ グループでの話し合いのスキル以前のところで、「何を言っても大丈夫だ」といった子供同士の信頼関係、雰囲気づくりがまさに必要である。どういう意見でもみんな認めて、話し合いの中で一つにしていくということが社会性につながる。コロナ禍でマスク越しの関係になり、そのあたりが少し薄れてしまったのではないかと感じる。
- ・ 石森さんの意見にあったように、子供たちが飛びつくような課題を与えるために、先生たち一人一人が毎回それをできるかと言われると難しいが、1ヶ月の中で一つでも、自分の方針で課題を与えられる形ができれば、主体性が広がっていくと思う。

【登米市立南方幼稚園 園長 星 良 氏】

- ・ 主体性というところで、保育の現場では、まず子供たちの自己肯定感を高めて認めてあげるところが基本かと考える。意欲的な環境の提供については、外遊びを中心として援助しているところである。
- ・ 信頼関係の構築というところでは、南方地区での幼稚園・学校との連携が、非常に良い取り組みに繋がっているのので、市内でも広がっていけばよいと思っている。

【東松島市PTA連合会 会長 松谷 多加子 氏】

- ・ 幼児教育に携わっていて、遊びの時の保育者のアプローチで主体性は大きく変わるように感じる。昔は設定保育が主流だったが、今は子供たちが自分でやりたい遊びを楽しめるような環境づくりに力を入れている。保育園でのゲーム的な遊びでも、子供たちが自分なりに考えてルールを作っていける遊びを素直に楽しんでいる。
- ・ 幼児期はストレートに思いを発散できても、小中高と上がっていくにつれて、恥じらいが出てきたりして自分から発信できなくなってしまうのが残念だが、そういったところも前向きに進んでいけばいいと思う。

【佐藤副教育長】

- ・ 皆さんの話を聞いて、やはり主体性というのを引き出すのは、先生の投げ掛け方であったり、遊びの提案だったり、また、石森さんがおっしゃったような、きっかけづくりが大切なのかと思った。そして、仲間で協働していくとなれば、お互いを信じられる信頼関係が重要になってくると思った。その他何かご意見あるか。

【特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク代表 伊勢 みゆき 氏】

- ・ 今回の見直しのタイミングで、各教育事務所単位でこのような意見交換の機会を作っていたことに改めて感謝したい。この計画がさらに良い方向に進んでいくために、意見を述べたくてもなかなか述べられないような人たち、宮城の教育をより良くしたいと思っている人たちなど、様々な立場の方の意見を聞く場があると良いと思う。私たち一人一人が主体性をもって場に参加できるように、グループワーク形式で意見を集約していくといったやり方なども取り入れて、計画に反映していただけると大変ありがたい。

(4) 仙台圏域

日 時：令和5年6月12日（月）午後6時から午後7時45分まで

場 所：仙台合同庁舎2階 201・202会議室（仙台市青葉区堤通雨宮町4-17）

出席者：別紙参照

<発言要旨>

【名取市立増田中学校 3年 伊藤 歩太 さん】 ※意見発表

- ・ 私は、小学校3年生から小学校6年生までの4年間をシンガポールで過ごした。その経験から、日本の教育について話したいと思う。
- ・ まず一つ目は、英語についてである。シンガポールでは、各個人のレベル別に少人数クラスに分かれ、ネイティブ講師から英語指導を受けていた。授業は、まず題材を読み、次に単語や文法を確認し、最後はプレゼンテーションやエッセイを書くという流れで、自分の言葉で伝えるための英語を身につけることができた。それに対し、日本では受験のための英語に力を入れているように感じている。文法や単語を重視し、日本語により英語を勉強しているため、英語をコミュニケーションの道具として使えるのか疑問符が付く。
- ・ 近年のグローバル化の進行により、コミュニケーションの道具として使う外国語の重要性はさらに高まっていくと考える。そのような中、語学力を高める第一歩として、私たちは生きた英語を身につける必要性があり、そのためには、生きた英語に触れることが最も重要である。生きた英語に触れる機会を増やすには、ALTが来てくれる時間を増やす、英語のドラマ・映画などを活用することが有効ではないか。また、日本では話す時に文法ミスを怖がってしまう人が多いように感じる。多少文法が間違っても、伝える意欲を持って、自信を持って英語を話せる環境をつくっていくことが必要だと考える。
- ・ 二つ目は超ディベートについてである。これは、シンガポール日本人学校で取り入れられていた授業で、自分にとってはとても楽しく、思い出がある大好きな授業だった。この超ディベートでは、普通のディベートと違い、二つの立場から意見の良いところを見つけ、足りない部分を補完し合い、より良い答えである第三の答えをつくり上げることを目的としている。この授業では、議論の時に自分の意見の説得力を高めるため、受け身ではなく主体的に情報を求める必要があり、社会的なことを自分ごととして捉える必要があった。
- ・ 情報を集める過程では見つけた情報が普通の授業でやったことと結びついていることを実感し、より普通の授業への主体性が育った。この授業を通して、様々な情報を見つけ、様々な価値観に触れることで、自分の視野が広がり、価値観の多様性の大切さに気づくことができた。また、自分の意見を持ち、議論することで、社会的な問題に対し、自分に何ができるのだろうかという問題意識を持つことができた。さらに、活動を通して、一つの単元や教科だけでは足りないことに気づき、それらをつなげて多角的に見る事で、様々な分野に結び付けて活用する経験をする事ができた。
- ・ 分野をつなげてみる経験は、日本でもできている。増田中学校の社会科の先生は、物事の背景や前後のつながりを教えてくれ、色々なことの見え、自分への関連性を感じることができている。これにより、授業が楽しい、もっと探究したいという意欲を持つことができた。このようなつながりが可視化される授業が増えれば、授業はもっと楽しくなっていくと思う。
- ・ ここで話した英語教育や超ディベートは、自分の人生を自分でつくり上げ夢を持つための手段の一つに過ぎないが、自分自身、これらの授業をきっかけに外交官になるという目標を持つことができた。これからグローバル化がさらに進行し、色々な人々と関わる必要性が生じるだろう。きっと、日本でもグローバルな人材の育成が求められる。そんな世の中で夢を広げるために、一つ目に「コミュニケーションの道具としての英語を身につける」、二つ目に「独立した点をつなげて他の分野に生かす力を身に付ける」、三つ目に「色々なことを主体的に捉え自分の意見を持つ」、四つ目に「価値観の多様性を知り、それを理解することで尊重する姿勢を身につける」ことが大切。そのためのツールの一つとして、違った形態の英語教育や超ディベートのような分野間のつながりが見える形の授業を取り入れるのはどうか。

【宮城県仙台二華中学校 3年 千葉 咲玖 さん】 ※意見発表

- ・ 教育を受けさせてもらっている立場として、私が感じていることについて話していきたい。

- ・ 最近ではICTの活用が進んでいると感じており、自分の通っている中学校でも多い日には一日のほとんどの授業でタブレットを使うことがある。タブレットを活用することでのメリットは、私たち生徒目線からも多いものと感じており、その中でも自分が思う一番大きなメリットは、授業の幅が広がるということである。黒板の板書をノートに写すことや、先生の話聞くだけの授業よりも、タブレットを1人1台持っていることで、授業の幅が広がっていると感じている。
- ・ スライドを作ったり、興味ある分野を調べたりできることは、主体的な学びにつながると思った。しかし、個人的にはタブレットの使用以上に授業形式が重要だと感じている。タブレットを使えば、個人とタブレットの間で授業を完結させることも可能だが、私は友達と意見交換や話し合う時間を大切にしてほしいと思っている。コロナ禍で人と意見交換するような授業が減り、先生の話聞くだけの授業が増えていった。そのような時に役立ったのがタブレットであり、タブレットを使えばお互いに話さなくても、ほかの人のノートを見ることができ、自分が調べたレポートなどの発表についても動画を撮影し「クラスルーム」に提出すればよいため、感染対策には最適であった。
- ・ しかし、それでは家庭や塾での学習と大差がないように思っている。今の自分が実際に学校生活で楽しいと思っていることも、友達と対話ができることである。自分の意見を伝える能力が身についていると感じられるし、色々な人から考え方の違いを学ぶことができるからである。これはどの教科でも同じことが言えると思う。例えば、自分の通う中学校の英語の授業では、単元が終わるごとに一つ問題を自分で設定し、それについて考えたり調べたりして、自分の考えをスライドにまとめて、お互いに発表し合う授業がある。この授業では、タブレットを活用して友達との対話ができるので、とても楽しく受けられる。自分の考えをまとめて発表する練習にもなり、自分とは違う分野を調べている友達の説明を聞くことはとても興味深い。
- ・ ICTはとても便利なツールだが、あくまでもツールでしかない。タブレットが無いよりも有った方が有意義な授業が受けられるが、それはその使い方にもよるのではないか。一方通行の授業ではなく双方向の授業の方が、そのツールをより有効活用できると感じている。自分はこれからも学校でしかできない友達との対話を大切にしていきたいと思っている。

【塩竈市立第一小学校 校長 堀内 瑞 氏】 ※意見発表

- ・ このコロナ禍において、学校現場にどのように影響を受けてきたかということも含めて、学校の現状と課題を三つの視点からお伝えしたい。そして、第2期宮城県教育振興基本計画の改訂版の素案についての意見も一緒に申し上げたい。
- ・ まず一点目は、人と人との関わりについてである。ようやく新型コロナウイルス感染症が第5類に位置付けられ、マスクを外しての教育活動、多くの人が集まった教育活動が再開されるようになった。子供達は、本来たくさんの人と接する中で多くを学び、社会性を身に付けていくが、マスクを着ける期間が長く、人と接することが限られてきた中で、子供たちにどのような影響をもたらしたのかについて、非常に気になっていた。専門家の研究が進んでいるようではあるが、教育の現場にいる立場から気付いたことをお話したい。
- ・ コロナ禍において、子供同士、あるいは子供と教師とのコミュニケーションにおいて、相手の気持ちを少し理解しにくい状態だったと考えている。学校では、様々な子供たちに不応状態やトラブルなどがあるが、それがマスクをしていたこと、人と多く関わってこなかったことでどのような影響があったか、注意深く見ていく必要があると思っている。小学校では、1年生などには「校長先生マスクを取って」と言われることが非常に多く、やはり、マスクを取ったらどんな顔をしているのか、その表情からどのようなことを考えているのか、子供たちは読み取りたかっただろうと思われる場面が多々あった。特に、学校や教室になかなか馴染めない子供、足が向かない子供、特別な配慮を要する子供、また、コロナ禍で大学生活を過ごして現場にきた若手教師にとって、これから具体的な対応策が求められていくものと考えている。
- ・ 今回の計画素案では、「学びの保障と教育機会の確保」が、新たに基本方向8として設けられている。不登校の児童生徒が多いことは、従前からの課題であったが、宮城県では学び支援教室事業などの具体策が講じられており、成果を挙げてきた。今回の改訂では、さらに新しく社会全体で子供を支援する体制の充実が明記されており、これまでも行われてきた様々な団体による支援も、この中に含まれるのかなど期待をしている。
- ・ 不登校等の課題を抱えている児童生徒への取組のみならず、基本方向5に「多様なニーズへの対

応」に加えて「可能性を引き出す」という文言も付け加えられており、予測困難な時代の中で、様々な課題を抱えている児童生徒の自立に向けて、とても大切なことだと思っている。ぜひ、教員研修などでも可能性を引き出すという内容について、取り組んでいただければと思う。先ほど若手教師への対応策ということを申し上げたが、子供たちのみならず、コロナ禍でのリモート学習中心の大学生時代を過ごした若手の先生方が、現場で子供達と直接向き合う毎日を送っているところであり、そこで実際に子供たちを前にして、どのように関わったら良いのか、具体的にどのような言葉をかけたら良いのか悩んでいる教員もいることから、体験型の研修等に取り組んでもらい、これらの教員の課題解決を図っていただきたいと思う。このことは、計画素案への意見ではないが、学校教育全体にかかわる課題と私は捉えている。

- ・ 2点目は、先ほど中学生の千葉さんから1人1台端末を用いた学習についての話があったが、GIGAスクール構想による1人1台端末等により、学習がより速く進むようになったと思っている。こういった視点を、今回の素案の中では全体に盛り込むという説明があり、大変素晴らしいと思っている。小学校では、児童は教師との課題のやりとりや、児童同士の協働的な学習の際に、タブレットを用いた授業などを行っている。自治体にもよると思うが、一人一人の実態に即したAIドリルの活用なども行っており、タブレットを用いた学習がだいぶ進んでいる。コロナ禍においては、リモート学習もタブレットを用いて行うことができた。これから進めていくに当たっては、市町村によって導入と活用には格差があると聞いているので、県の後押しがあれば、どの児童生徒もこの恩恵を受けられることから、専門人材の派遣も含めてご検討いただきたいと思う。
- ・ 3点目は、学校・家庭・地域の連携についてである。コロナ禍で制限されていた多様な人材の活用が少しずつ復活してきた。自分が勤務する塩竈市では、全ての小中学校がコミュニティ・スクールとなり、地域の方、保護者の方の意見を反映した学校経営を行っている。また、同時に、様々な地域講師の活用、地域ボランティアの協力をいただき、常に地域の方に来校を呼び掛けているところで、子供たちとの交流も盛んに進んでおり、多くの地域の方に学校に足を運んでもらうことの効果を非常に実感している。多くの大人の支援の中で、子供たちは安心して過ごせているものと思っている。
- ・ 学校では教員が、地域では地域の方たちが自分たちを見守ってしてくれる。そして、地域の方に学校に来ていただき勉強を教えてくれることは、非常に素晴らしいことと思っている。このコミュニティ・スクールは、どこの地域でも少子高齢化が課題となっている中、子供たちによる地域のお祭りなど伝統行事への参加や、商店街の活性化などにも貢献している。デジタル化が進む時代だが、やはり直接的な人と人との関わり合いが、特に小学生期は人としての基本を形成する時期でもあるため、非常に効果があると思っている。また、最近色々な場面で聞かれる「斜めの関係」の構築もできていると思っている。計画の中にコミュニティ・スクールのことが明記されているので、引き続き、宮城県としても力を入れてやっていただきたい。
- ・ 最後に、宮城県教育振興計画の重点に位置付けられている、志教育について話題提供したい。本校には、東日本大震災時に被災経験のある初任層の教員が1人いる。6月の防災学習の際、この教員と、同じく小学校の時に被災した教育実習生の2人が、東日本大震災時の体験談を児童の前で話してくれた。小学生で被災した当時は、両親に会えずつらい経験もしていたが、それを乗り越えて、そのことが宮城の教育に携わりたいという志になって、子供達の前に立っているという内容だった。志教育が始まって長いですが、このような形で実を結んでいることが素晴らしいと感じた。以上、小学校の学校現場からの意見を申し上げた。

【宮城県宮城第一高等学校 教頭 飛鳥 貴 氏】 ※意見発表

- ・ 学校関係者という形で3点をお話したい。Society5.0とVUCAの時代をこれから迎えるに当たっての教育の現状、そしてこれからの高校生に求められる力について、それから、本校におけるICTを中心とした取り組みに関する事、最後に、これからの学校教育で必要な事をお話したいと思う。
- ・ 内閣府の資料によると、これからのSociety5.0に対して、これまでのSociety4.0は情報社会と言われており、必要に応じて人間の手で命令を出してコンピューターに計算させ答えを引き出す、あるいは、クラウドにあるデータを持ってきて人間が利用するという時代であったが、これからのSociety5.0では、至る所にセンサーが張り巡らされ、そのセンサーを通じて収集されたビッグデータを人工知能、AIが解析し、我々に次々に情報を与えてくるという時代になるものと示

されている。

- ・ 経済発展と社会的課題の解決を両立させていくことで、様々なことが便利になって、豊かさにもつながっていくのだろう。だが、便利になったから全てが良いわけではなく、一部が進歩すると他の何かが退化するという関係もあり、AIが進化することで、もしかしたら人間としてとても大事なものが失われていくのではないか、あるいはデータから導かれた答えが普通の感覚とはかけ離れたものとなることはないか、心配しているところ。
- ・ それから、VUCAの時代という将来予測が困難な時代になってきている中、突如起こる出来事に対処する能力は、これから生きるために大切なスキルであり必要なのだと考えている。これは、これからの高校生だけではなく、今までの高校生にもこの課題解決力と言うべき能力は必要などされてきたのであって、もしかしたら問題を与えられて、それに適切に答えられるかという点で言えば、受験偏差値が高ければ良いと捉えられていたのかもしれない。先ほど失うものがあるのではないかという話をしたが、これからの高校生は、今まで以上に人間力が必要なのだと思っている。人間力とは普通の感覚を持つことと思っており、今と昔の普通に対する捉え方は違うのかもしれないが、我々の考えている普通の感覚というものを伝えていく必要があると感じている。人と協力して一つの方向性を導き出すことや色々な議論を重ねて答えを導くことが必要とされる場面で、それを成しえる力が人間力ではないかと思う。
- ・ 予測困難な時代ということで、色々なトラブルに対して、その何が問題なのか、問題になっているのはどこの部分かをきちんと理解して問題点を見つける課題発見力、言い方を変えれば、問を作っていく力と、この部分が変なのではないかと疑問に思う素地が必要になってくる。1人ではなかなか解決が難しい問題が起きた時に、仲間と共感しながら同じ方向に進んでいく能力が必要になってくると思っている。計画素案の目標のところ少し書いてあるように、絶えず変化する予測困難な社会を生き抜く人間を育むという文言のとおり、学校でこのことを伝えていかなければならないだろうと思っている。
- ・ 次に、二つ目の本校におけるICTの活用状況についてである。この3年間のコロナ禍でICT活用が多く学校の現場で一気に進み、本校も保護者からの欠席や遅刻といったやり取りでICTを活用している。コロナ禍における検温結果の報告、学校と保護者との連絡のやり取りも、児童を通すとプリントが親に届かないという問題があった中、その解決にもICTは良いツールだと思っている。授業や勉強に関しては、ほぼ全ての授業で現在ICTを活用している。学習事項の配信はもとより、課題提出もICTを使っている。それから、授業内でのグループワークをすることが多く、講義型の授業はほとんどない。「どうぞ考えなさい」という感じで進めているので、グループワークが大変に有効となっている。
- ・ 理科の授業で色々な場所に観察に行った時に、タブレットで撮影して記録すること、情報収集のためにインターネットを使用すること、また、通常の授業ではタブレットに入力したものを全員で共有していく形式の授業を行っている。1人1台端末がかなり進んでいるため、教師側としては、鉛筆や消しゴムと同じ文房具という感覚で使い倒して欲しいという気持ちがある。
- ・ 実際に学校でどういう使い方、与え方をしているかということ、今年は県で全学校に1人1台端末を配布したので、本校も1年生はそれを使用している。去年、一昨年に入学した2年生、3年生についてはBYOD (Bring Your Own Device) ではなくBYAD (Bring Your Assigned Device) という形式で、学校で購入、設定したものを生徒に与え、そのお金は保護者に出してもらい、卒業する時に持って行ってもらうという形になっており、生徒本人のものとなっている。やはり、貸与端末では学校に返す必要があり壊すことが怖くなるため、柔らかい使い方なると思うので、BYADの方がガンガン使っていける感じがする。BYODになると良いとは思っているが、もしかするとまたBYADに戻るかもという気もしている。
- ・ そして本校は、今の2年生、1年生を対象に探究科というものを作っている。すべての教科科目で探究の内容が入ってくるのだが、タブレットはもはや特別なツールではなく文房具であり、辞書になり、百科事典になり、さらに正しいかどうかは別としてオンタイムで最新の情報も得られる、そんな時代になっている。さらに、オンタイムで世界中ともつながれるので、英語の授業の中で、実際に世界に何校かある姉妹校のうち、最近では時差がないのでオーストラリアとやり取りをすることが多い。タブレットが学びを深め極めるには欠かせないツールとなっていて、その場で何か調べることができるというのはすごく大きい。
- ・ そして、先生方の話になるが、公務におけるICT化はかなり進んでいて、県で設定してもらっ

た教務支援システムというものがあるため、先生方が昔と比べても楽をさせてもらっている。だが、先生方が生徒に向き合う時間については、授業があり、部活があり、採点作業もある中、その採点は一枚一枚丁寧に見なければならず、最近は丸を付けるだけでなく、書かせる問題が多いことから、採点には大変な時間がかかる。その負担を軽減するための答案採点システムというものが世の中では発達してきており、仙台市などでも導入が決まっているという話も聞く。ぜひ、先生方に生徒に向き合う時間を与えるために、働き方改革ということでも、このようなシステムを導入してもらいたいと思う。

- ・ 先ほど、これからの高校生に求められる力というお話をしたが、課題発見力の部分に関して補足すると、やはり本物は強く、実物や現物は何にも代え難いものがある。先ほど中学生から英語能力ということで、シンガポールの話があったが、本校でもオーストラリアに研修旅行に行って、実際にそのものを感じて、空気を吸うと違うということを実感している。
- ・ 去年、オーストラリアに視察に行った時に至る所を見て回ったが、特に山一面に広がる真っ青色合いを目の当たりした時に、空気感がまったく違うと感じた。その正体はユーカリで、油成分を多く含んで燃えやすいため大きな火事になることが多いが、このユーカリは性質上外側しか燃えないため、すぐに再生するという話も聞いた。また、日本であればカラスのような、見たことのない鳥がゴミをあさり、見たことのない木が公園に生えている。行かないとわからない現物はやはり強いと感じたので、今年も2年生で行こうと思っている。このように、学ぶ環境の整備をお願いしたいと思う。

【仙台市PTA協議会 会長 高橋 由臣 氏】 ※意見発表

- ・ 中学生の視点と教師の視点から貴重な意見を聞かせてもらった。自分からはPTA協議会ということで、保護者目線から意見を述べたい。まずは、もちろん勉強も大切ではあるが、小学生から中学生、やがて青年から大人になる心の成長、体の成長、命の大切さ、そういったところもとても重要な部分と感じている。
- ・ コロナ禍でPTA活動ができない期間が4年ほど続いたが、今年5月8日からは学校の中でもマスク着用は自由になり、PTA活動もその空白の動けなかった間に、保護者も卒業したりPTA会長も、次の中学校や高校に進んだりということで、引継ぎがなかなかできなかった現状を目の当たりにしている。子供たちは、学校の勉強以外の部分についても、色々な方々と関わる、色々な世代の方々と交わる社会教育が非常に大事である。今まで当たり前のように行ってきたPTA活動が何も行えなかったが、子供は学年が上がり、中学生は高校生受験も問題なくできたということで、PTAは不要なのではないかという考え方もある中、PTA活動を経験しないで次の学年に進んでしまうことに一抹の寂しさを感じる保護者や先生方も多かった。
- ・ 仙台市内には187の小学校、中学校があるが、その考え方や活動はそれぞれのPTA単位で進めているところなので、全部尊重されるものと感じている。何が正しく、どれがダメということではないが、PTAの立場としては、PTAへの入会に関する問題、不登校の問題、先生方の働き方改革、部活動の外部指導の移行など、本当に待ったなしの状況にあり、様々な問題が仙台市PTA協議会だけではなく、宮城県PTA協議会、全国のPTA組織に、「どうしたらいいのか」、「こういう要望をして欲しい」という意見が寄せられているところである。
- ・ そのような中、仙台市のPTAでの取り組みをお伝えしたい。全国では、会長や保護者が集まって座学の研修会を行っているところが多いが、仙台市では全国的にも珍しく、座学の研修会ではなくお祭りを20年前に始めている。「仙台市PTAフェスティバル」という勾当台公園市民広場で秋に行われるイベントであり、子供たちの前で大人が学ぶこと、大人の学びの場というのもPTAの位置付けなので、子供たちの前で楽しそうに有意義な時間を過ごしている先生方や大人たちの姿を子供たちに見てもらおうとして発足した。
- ・ この事業も、コロナ禍で勾当台公園市民広場には3年間も集まれなかったが、それならばウェブ上でお祭りをやろうということで、YouTubeやZoomで録音録画したものを配信するため、それぞれの単位PTAに合唱やブラスバンド、運動部でも良いので、表現・発表したいものがあるか募集したところ、1年も無駄にしたくないという気持ち、自分たちが卒業してしまう前という思いの子供達と保護者が協力してくれ、動画などのコンテンツを集め、2年間ウェブ上でイベントを行うことができた。大人が知恵を出し合い、話し合えば、大抵のことは形を変えても行動できることを、地域の子供達に示せたのではないかと思います。また、その取組が全国的にも珍しいお祭

り形式ということで、日本PTA連絡協議会の会議で発表したところ、同じく政令指定都市の名古屋市や北九州市から、うちの地域でもやりたいとの声が上がって視察に訪れた。大人の元気な姿を子供たちに見てもらいたいし、子供たちも参加しているいろんな表現ができるイベントにもなっているため、これからも続けていきたいと思っている。

- ・ 令和7年度に東北ブロック研究大会仙台大会が行われ、そこでは地域教育、家庭教育、地域連携、人権教育、環境などの話題のほか、学校に行きづらい、家を出るのが少し怖いといった不登校の問題などについて最新の知識にアップデートする場となっている。子供たちの居場所は別に教室に限られないことを発信していかななくてはならない時代になってきているが、まだその認識を持っていない保護者もたくさんいて、学校の授業の様子を知らない、授業参観にも参加できないという、学校に来るのにハードルが高い保護者がいるのも事実である。我々としては、学校に来られない子供たちに君の替わりはいないということ、また、命の大切さについて、どんどん発信していく取組みを進めていきたいと思っている。
- ・ 授業が面白くない、部活を頑張りたい、大人に反抗したい、そういう思春期は私にもあったし、ここにお集まりの皆様にも、きっと一つや二つあったはず。自分が子供の頃のこと、反抗期のこと、目の前の子供と向き合いながら、大人も勉強していく必要があると思う。人生を今この瞬間という点でしか見ないで感情的になるのではなく、長い線で捉えることが大事で、山あり谷ありかもしれないが、それぞれの人生を楽しく歩んでほしいと願っている。先生方と児童生徒の活動や体験を後押しして行くのがPTAの役割だと思っているし、同じ考えを持つ保護者や地域の仲間をどんどん増やしていきたいと思っている。
- ・ 最後に、仙台市PTA協議会の掲げる私たちの誓いを紹介する。「1 私たちは保護者と教師がお互いに協力し、子どもたちの健康で豊かな心を育むPTA活動を推進します」、「2 私たちは子供たちが家庭という大きな愛情の中で健やかに生まれ、家族や地域を大切に考え行動できるように努めます」、「3 私たちは学校と地域及び関係機関と連携し協力し、子供たちの命を守り、安全で安心な生活ができるような教育環境づくりを目指します」、「4 私たちは子供たちが日本の文化や歴史を大切に、他の国の人も理解し合い、平和な社会、国際社会を築く一員としての自覚を持てるように努めます」、「5 私たちは東日本大震災の教訓を活かし、子供たちの夢や希望の実現のために力を合わせてできる限りの支援をしていきます」。仙台市PTA協議会としては、この誓いをこれからも進め、活動の力としていきたいと思っている。

【特定非営利活動法人アスイク 代表理事 大橋 雄介 氏】 ※意見発表

- ・ 我々の団体は、子供の貧困や不登校、虐待など様々なテーマに取り組んでおり、今日はどのテーマにしようか考えた。県が示した計画素案には、最近よく取り上げられているヤングケアラーについての明確な記載がなかったようなので、このヤングケアラーについて意見を述べたい。
- ・ 当法人は、生活困窮世帯の子供に対する学習生活支援事業、不登校の子供たちの居場所づくりの事業、フードバンク事業、訪問支援事業など、様々な事業を行っていて、その中で年間1,300人ほどの子供たちが私たちの団体と関わりを持ち、その内およそ1割がヤングケアラーに該当するという状況である。今の子供たちの生きづらさは、貧困や不登校、ヤングケアラーなど、自殺も含めてたくさんあるところだが、まず一つ理解しなければならない大前提として、ヤングケアラーの問題を抱えている子供たちというのは、ヤングケアラー問題を単独で抱えているのではなく、それ以外の生きづらさを複合的に抱えているケースが多いという認識を持って、子供たち一人一人の視点で向き合っていく必要がある。
- ・ ヤングケアラーは、大人の代わりに家族などのケアを行っている子供達であり、厚労省の調査では、日本の中高生の5%前後がヤングケアラーに該当すると報告されている。また、宮城県の調査でもだいたい7%ぐらいが該当すると言われている。一つ注目したいのは、ヤングケアラーは、ケアをしている時間や日数、年数といった量的な側面、あるいは、どんなケアをしているのかという内容も問われていない。そして、子供本人がどの程度負担を感じているのかという負担の程度も問われていない。したがって、ヤングケアラーであること自体がまず問題ではないことを認識しておく必要があると思う。
- ・ 私の小学校5年生になった上の子には、今年小学校1年生になった下の子の児童クラブの送り迎えをしてもらっている。その上の子にヤングケアラーを知っているか尋ねたところ「私、ヤングケアラーじゃん」と答えたので、続けて、なぜそう思うのか聞いたところ「送り迎えしているか

ら」との返事だった。言われてみれば確かにそのとおりだと思うが、それは別に問題視されるレベルのことではなく、ヤングケアラーという言葉の中に、お手伝いレベルの子もいれば、後述するような対処が必要な子供まで幅広く含まれる概念であることを、まず理解する必要があるだろうと思っている。

- もう一つ、ヤングケアラーにはポジティブな側面もあると捉えている。これは、私達が関わっているヤングケアラー当事者にインタビューした時のことになるが、母子家庭の5人兄弟で育った方がいて、この方はおばあさんの介護をずっとやってきた。当然大変な経験もたくさんしてきたのだけれども、今思えば自分の大切な家族の介護をやっていなければ、今頃もっと後悔していたと思うと話していた。それからもう1人、母子家庭でひとり息子として育った方の話になるが、精神疾患を持っている母親のケアをしながら育ってきた経験があるからこそ、将来医者になりたいという目標が出来たし、その大変なことに耐えられた経験があるからこそ、勉強などを頑張っていこうという気持ちになれるという、ポジティブな側面もあったということ語っていて、子供たちからするとアンビバレントな感情があるところも、大事なポイントなのだと思っている。
- ヤングケアラーが必ずしも問題ではないと話したが、ではどのような場合に問題になるのか。例えば学校生活という点からは、遅刻や欠席につながるような状態になること、社会的関係で言えば、友人関係を築くことに影響があること、心身の健康という点で言えば、子供達の睡眠不足やメンタル的な疾患につながる。そういった部分で問題があれば、しっかり対処すべきヤングケアラーであると考えていく必要があると思っている。
- 我々が色々な事業を通じてヤングケアラーと関わっている中で、2つの事例を紹介したい。1人目は当時中学生の子供で、うつ病で家事ができない母親に代わり未就学児のきょうだいの面倒を見ているため、授業が終わったらすぐ家に帰らなくてはならず部活動に入ることができない。この子は、学校の中で部活に入っていないのは自分だけだと思っていると話していた。もう1人は重たいケースで、親が自殺未遂を繰り返している。その子は、夜に親が自殺未遂を図ろうと外出することが心配で、玄関に布団を敷いて見張るという生活をしている。そのため、朝起きることができず、たまに頑張っ学校行ってもいじめのターゲットにされかねず、ほとんど欠席している。実際このようなケースにたくさん遭遇しており、この子供達は明らかに対処が必要なヤングケアラーだと思う。
- ヤングケアラー問題の難しさは、やはり子供側からSOSを出しにくいという部分だと感じている。子供の視点、例えばケアをすることは今までやってきたことだし、当たり前なことだと感じている。そして、周りに相談したとして、子供にこんなことをやらせている親はひどいというように、自分の大事な家族が悪者にされるのではないかと心配になる子供の気持ちもあるし、相談しても大人にわかってもらえないのではないかとという気持ちもある。そういった子供たちのSOSの出しにくさにどうやって対処していけば良いかが、この問題の難しい部分でもあり、大事なポイントだろうと感じている。
- 我々は、仙台市などと共同して、オンライン上でヤングケアラー当事者の相談に応じるオンラインサロンの開設や、サロンについて学校で全生徒向けにチラシを配布してもらおうといった周知、また、ヤングケアラー支援のための関係機関のネットワークづくりなどの様々な取り組みを行っているが、率直なところ、サロンを開設しても当事者の子供たちとは接点を持つことはなかなか難しく、それは先述したとおり子供側からSOSを出しにくい状況にあり、自分たちからこういう場にはつながりにくいという、ヤングケアラー問題の特性があるのだと思う。
- だからこそ、やはり学校という場がまず中心となり、ヤングケアラーの子供達の早期発見や関係機関とつなぐ後押しをするという役割を担うことが必要と感じている。当然、先生方も忙しい中、ヤングケアラーにも対処していくのは難しいと思うので、別にヤングケアラーに特化する訳ではなく、学校の中で何か抱えていそうな子供たちに気付いて拾い上げて、ヤングケアラーに限らず虐待についても適切な機関につないでいく機能が必要だと思っている。そのために、学校の福祉的側面を強化するよう、スクールソーシャルワーカーの活用が今後ますます大事になると思う。スクールソーシャルワーカーの方々は非常勤職員であるなど、この活動だけにフルタイムで従事していない方が多いことから、当然、国の政策とも連携する必要があると思うのだが、スクールソーシャルワーカーが、長時間コミットして活動できるような基盤を整備することもこれから大事になってくるのではないかと感じている。
- 最後に一つの参考として、ヤングケアラー支援の先進地と言われているイギリスでどのような

取組が行われているかを紹介したい。ウィンチェスター市では、市内五つの中学校で年度の初めに1年生を対象にしたヤングケアラーの説明会を行っている。ヤングケアラーとはどういう子供たちで、どういう感情を抱いているのかを寸劇のような研修を生徒たちに実施をして、説明会の最後には、「ヤングケアラーの当事者で何か相談したい子供たちは、昼休みに学校の中でケアラーミーティングをやっているから来ていいんだよ」ということを説明して、相談の場までをつないでいくという取組をやっている。そのケアラーミーティングでは、この団体スタッフが一緒に食事しながら、その子供たちの困りごとを拾い上げてアドバイスし、場合によっては専門的につなぐようなハブの役割を担っている。ヤングケアラーを待つのではなく、学校という場に外部の団体がアウトリーチをしていって、積極的に見つけていく、また啓発活動もするというような取組を行っている。日本で同じことを行うのは難しい部分もあると思うが、やはり学校をヤングケアラーの発見の場として機能させていくことは、今後必要になってくるだろうと感じている。

【株式会社日立ソリューションズ東日本 品質生産性本部担当本部長 小寺 竜太郎 氏】 ※意見発表

- ・今日はコンピューター会社の人間として、チャットGPTの話をしたい。3週間前に意見交換会の話のいただき、チャットGPTと言えば日立と言われるような原稿を準備したのに、世の中のスピードが凄く速くて、昨日のテレビ番組で見たなという内容になってしまう。この速さに現場の先生方も困っていることと思うので、我々がその困りごとをこうして解決しているという話をしていきたい。
- ・自分は、3年ほど教師をやった後に、コンピューターの仕事に転職した。自分の趣味がプログラム作成であり、どんなプログラムを作ったかという、休みの日に4つの数字を組み合わせた四則演算でゼロからいくつの数字まで作れるかというので、51まで作って満足している。
- ・生成系AIと聞くようになったが、そもそも今までのAIは何なのかを簡単に言うと、一つは統計的な判定AIという、例えば、暑い日は冷やし中華が売れるという分析を行うもの、そして画像判定AI、それから制御系AIという自動車走行や快適な空調管理を自動で行うなどが、これまでのAIの機能だった。今の生成系と付くAIには何ができるかという、主に言うと何か物を作ってくれる。画像を作ったり、文章を作ったり、プログラムを作ったり、そういうものを作ってくれるのが生成系AIである。チャットGPTという、ある会社の特定のサービスを指したり、全体的なその機能ことを指したりと、まだ定義が揺れ動いているようだ。
- ・宣伝するわけではないが、日立グループはコンピューターの会社なので、これで世の中の物事を解決するので、我が社にお任せくださいということで、ニュースリリースをやっている。ポイントは社内外にということで、我が社はお客様にもAIを提供していくが、自分たちも社内でも使う、内外両方で使うという活用宣言をしながら進めている。
- ・生成AIの仕組みを簡単に言えば、生成系AIに向けて「季節の挨拶を作ってほしい」とインプットすると、生成系AIが、今は春なので「若葉青葉の候・・・」と文章を作ってくれる。これが私たちから見えている生成系の姿であり、なぜこんなことできるかという、インターネット上から研究成果のデータや文書、その生成系AIを作成した会社が持っている情報もあるかもしれないが、あらゆる情報を生成系AIの回路に大量に詰め込みながら作っている。それから、自分が使っているのと同じように横の人も使っていて、同じように質問をして同じ答えを得られることが大事である。
- ・我が社でも生成系AIが出た当時は、やはりリスクがあるのだろうか、著作権違反や情報漏洩の恐れがあるのではないかという人がいた。この点については、我が社では入力のところと出力のところを分けて捉えることが大事であると考えている。まず入力とは、季節の挨拶を考えて欲しいなど生成内容を入力することだが、ここにも個人の名前や住所などを入れて、その情報をAIが学習に使用するとしたら、その情報が第三者に横流しで伝わる可能性がある。出力に関して、著作権の部分でコピーは不可という条件が入っていた場合でも、そのまま利用してしまうおそれもあるほか、嘘のニュースを引用した場合の品質上のリスクなど、それぞれ背景を調査しながらリスクを潰していかななくてはならない。そのことは、企業ではやっているが、世の中全体で行っていくべきことだと思っている。
- ・それから活用方法について、実際にプログラム作りをさせてみるとどうなるかについてである。先ほど、4つの数字を組み合わせた四則演算で数字を作るプログラムのことを紹介したが、チャットGPTを使うと、例えば「TypeScript というプログラム言語で数字の組み合わせを作って」

と入力すると、その場でプログラムが四則演算の組み合わせを作りはじめて、自分がゴールデンウィークあたりに10日間ぐらいかけて作成したプログラムが、わずか数分で出来上がった。我々は、プログラムを作ることで収益を上げているのに、客側がもう企業に頼まないで自分で作るという世界が来るのではないかと戦々恐々としている。

- ・ 軽いまとめとして、AIは便利なのだが、今までプログラミングで稼ぐことを仕事にしてきた我々がAIに取って代わられないか恐ろしさを感じている。だが、AIはとても便利なので活用ながら、入力と出力のリスクを見ていくことが必要である。
- ・ 余談だが、学生の皆さんもいるので、先生方が読書感想文の宿題を出して、子供たちがチャットGPTを使ったらどうなるかを検証した。「読書感想文を作ってほしい」と入力したところ「自分で作りなさい。参照して自分で頑張ってください」と。「ではあらすじ教えて」と入力すると、今度は「あらすじはここに載っています」と。粘り強く「あらすじと何かその心の大切さを説明する文章を書いて」と入力すると、そこでようやく書き始めた。次に800字以内で、中学生が書いたらどうなるか、家族がこの前亡くなって寂しい思いをしている中学生の気分で書いたらどうなる、と続けていくともう生徒が書いたかどうか見分けがつかないものが出来てしまう。
- ・ 今まで人間がやらなければならない、人間にしかできないと思ってきた宿題もできるようになるので、生徒の悪用は厳禁だとしても、先生方はこれからどのように宿題を出せばいいのだろうかという課題に直面することになる。あとは本日、皆様が話されたとおり、勉強とは何だろうか。課題を解決する力、課題を見つける力、それそもそも勉強ってなんだろうっていう話になっていくのだろうと思う。
- ・ 余談としてもう一つ。教育関係者に生成系AIの現状とリスク、将来性を説明する資料を作ったという、大変に立派な資料を作ってくれて、自分がここで説明することもAIに頼めば全部できてしまうという、そのくらい衝撃的なこと。入力、出力のところにリスクがあることを見ていただいて、先生方、そして子供たち自身が、そのような課題を認識し、分析をしてもらおうとよいと思う。

—意見交換—

【佐々木副教育長】

- ・ 様々なお立場からお話をいただいた。まず一つ、伊藤さんの英語教育の話があり、自分の言葉で伝えるための英語を学んできたという内容だった。千葉さんからは、ICTの活用が進む中、意見交換の時間を充実させたいということで、画面上だけではなくリアルで意見を交わすことが大事という話もあった。堀内先生からは、コロナ禍における生徒との関わり方の影響等の話があり、飛鳥先生からは、ICTを使い倒して行って欲しいという話があった。高橋さんからは、保護者の立場からどのように子供達を受け止めていくか、大橋さんからは、ヤングケアラーの子供たちを見付けるのは、教員の気づきが大事だと思うなど、その子供たちの関わっていく力を育てていくために必要な学びであるとか、教育環境などについて、意見があれば伺いたい。

【名取市立増田中学校 3年 伊藤 歩太 さん】

- ・ 大橋さんに質問なのだが、普段学校生活をしている中で、家庭などでつらい思いをしているように感じられる友達に接することがあるが、その人たちのために、自分たち中学生がどのようなことができるのか、あとは、そのつらい思いをしている当事者を傷つけずに、学校の中でどのような手助けが可能なのかを聞かせてほしい。

【特定非営利活動法人アスイク 代表理事 大橋 雄介 氏】

- ・ 友達からつらいことを相談されたとき、友達にとって何が嬉しいのかは、人によって違う可能性がある。どのようにして欲しいのかを、こちらが決めつけずに相手にちゃんと聞いてあげることがスタートラインだと思う。
- ・ 相手からは言っていないという場合にも、学校という立場上、周りの人からアプローチしなければならない場面もあると思うが、相手を傷つけないためには、相手にも自分の家庭のこと、自分のネガティブな部分を周りに知られたくない気持ちもあると思うので、そのプライバシーが確保される環境で聞くことや、周りに気付かれないように配慮するだとか、抽象的な話になってしまう

が、その人が傷つくことがないような配慮が大事だと思う。

【佐々木副教育長】

- ・ 子供たちの何気ない言葉で傷つけるということは、よくあることだが、そういった子供たちの関わる力、感度を上げていくということについて、堀内校長先生いかがか。

【塩竈市立第一小学校 校長 堀内 瑞 氏】

- ・ 子供たちは遊びの中で関わり方を覚えていくことが基本だと思っている。子供たちは本来密接に遊ぶのが大好きなのだが、コロナ禍でそういう遊びができてこなかったことを実感している。コロナ前に当たり前にやっていた遊び、これは学級づくりにも関わることなのだが、その遊びを通じて関わることを自然に身につけられたら良いと思っている。
- ・ また、先ほど大橋さんの発言で、相手にまず聞いてみるとあったが、自分も同じことを自分の勤務する学校教員にも話したところである。子供達とどうやって向き合ったらいいのかという質問があったので、まずは、一緒に遊んで子供の仲間に入れてもらって、その上で、相手にお子さんに聞いてみたらどうか。やはり聞く、尋ねるということは、すごく大事だなと思っている。

【宮城県仙台二華中学校 3年 千葉 咲玖 さん】

- ・ 堀内先生が地域との関わりについて話していたが、自分の通っていた小学校では、運動会が地域ごとのグループで対抗する運動会だった。その中で、学年も年齢も関係なく、おじいちゃん、おばあちゃん世代の人もいればまだ幼い子もいて、全員が参加できる種目で競っていた。ところが、自分が小学校5、6年生になったあたりで、コロナに感染するから危ないということで、自分にとっての最後の年には縦割り対抗ができず、学年別での競技になってしまいとても悲しかった。
- ・ 今まではそれが普通だと思っていたものが、コロナ禍になってから、地域の人と一緒に関われなくなって寂しいという思いをしたので、やはり地域との関わりは大切にしていって欲しいと思っている。

【佐々木副教育長】

- ・ 今、千葉さんが話したのは、すごく貴重な行事だと思う。自分が住んでいる地域でも行事ができないこともあったが、コミュニティ・スクールの組織の中に、校長先生をはじめ地域の方々が入り、学校のグランドビジョンを作るため、地域の方々も意見を求められるようになった部分が大きいと思っている。その地域の特色や、そこで育った子供たちが大人になった時に、こういう取組が将来の地域とのつながり形成にも資すると思うので、先生方が退職や転勤をしたとしても、このグランドビジョン作りを継続していくことは良いことだと思っている。
- ・ 伊藤さんが、先ほど自分が相手のことに何か気づいている場面で、どうしたらいいのかを素直に聞いてみるという話があったが、いじめ問題には、いじめをする、いじめを受ける、その周りの傍観者という三つの考え方があって、傍観者が解決するキーポイントとされていた。学校を通じて子供たちと商店街や町内会、老人会など様々な人が関わることで、この子は最近元気がないとか、学校以外で大変な思いをしていないだろうか、その子供の顔がわかる関係になっていく。実際、運営協議会が発足してからそのような声が学校に寄せられていると聞いており、色々な面で大人たちが困っている子供を救済することができれば、成長を支えて、前向きに進んでいけるのだと思う。

(5) 仙南圏域

日 時：令和5年6月13日（火）午後6時から午後7時45分まで

場 所：大河原合同庁舎 2階 201会議室（柴田郡大河原町字南129-1）

出席者：別紙参照

<発言要旨>

【大河原町立大河原中学校 3年 佐藤 絢香 さん】 ※意見発表

- ・ 自分は大河原中学校で生徒会長を務めており、1年生の時から役員をしている。部活動はソフトテニス部に所属している。学校の雰囲気は、大河原中学校は「自覚、立志、健康」を校訓とし、一人一人が大河原中学校生である自覚を持ち、楽しい学校生活を送っている。我が校には真面目で静かな生徒から、やんちゃで元気いっぱいな生徒まで、様々な個性を持った生徒がたくさんいる。
- ・ 次に、私たち3学年の雰囲気、目標についてだが、私たち3学年は1年生の時から学年主任をしている神野先生という、何事にも熱心に取り組むとても熱い先生に引っ張ってもらっている。先生からは、「やればできるのに」とよく言われるので、もう少し自分達からというのを大切にして、卒業までに成長した姿を先生に見せたいと思う。また、良いところについては、3年間一緒にいることもあり、クラスの生徒間の仲が良いことや、何か行事があると全力で取り組み、自分たちが納得いくまで練習するところで、その熱心さが神野先生に愛される理由の一つだと思っている。
- ・ 次に、私が生徒会で頑張っていること、実施してきたことについてだが、私が今年掲げた公約は黒色、紺色のTシャツの着用を可とすることと、学年毎の行事を増やすことである。そのうち、黒いTシャツを有りにすることができ、今はワンポイント、または無地の白黒のTシャツの着用が可となっている。他にも、様々な行事の運営などもしており、会長や副会長の仕事は責任重大でプレッシャーになることも多かったが、やり遂げた時の達成感は一倍感だった。残り約4か月となったが、公約実現に向けて頑張っていきたい。
- ・ 次に、部活動で頑張っていることについてだが、私はソフトテニス部の部長をしており、私たちの目標は、東北大会出場と、みんなに応援されるチームづくりである。二つ目の目標のため、提出物の提出や日頃の挨拶はもちろん、朝に自分たちのコートの草むしりや、冬場は雪かきの手伝い、校内清掃を行ってきたし、これからも続けていきたい。
- ・ 次に、学校生活で楽しいと感じる時については、例えば、行事の達成感を味わえた時や、感動をみんなに分ち合えた時に、すごくやってよかった、楽しいと感じる。みんなが同じ気持ちでいることはとても嬉しいことなので、そのような時間をこれからもたくさん作っていきたい。
- ・ 次に、授業を受けて感じること、先生に期待することについてである。大河原中学校の先生方は、大変わかりやすい授業をしてくれて、教科書だけでなくタブレットを活用した授業が増えて、さらに分かりやすくなった。しかし、少し困っていることもあり、学年が上がり、特に主要5教科の先生が変わると、今までの授業とやり方が変わってしまい、ついて行くのが精一杯だったり、自分のやり方に合わなかったりと大変さを感じることもある。そのような場合にどうしたらいいか、そのアドバイスを先生方からいただきたいと思っている。その他にも、悩み事は人それぞれあるので、今まで以上に生徒と向き合って欲しいと思っている。
- ・ 次に、私が今頑張ろうとしていることは、今年の大河原中学校のスローガン「クリエイト、誇れる大中、輝け大中」のクリエイトの言葉どおり、自分たちでこれからを作り出して、今までの伝統にプラスアルファをして、みんなで大河原中学校を良くしていきたい。そのためにも、1人でも多くの意見・考えを反映できるよう、まず私たち生徒会役員が行動していきたい。
- ・ 最後に、自分が思う理想の学校像については、大きく分けて五つある。1つ目は笑顔が絶えない、2つ目はメリハリがある、3つ目は誇りを持てる、4つ目は地域の人から慕われる、そして最後は誰1人欠けることなく卒業すること。これを先生方に頼って作るのではなく、自分たちで作りに上げてこそだと思うので、これからも今まで以上に頑張りたい。

【大河原町立大河原中学校 3年 島貫 晃輔 さん】 ※意見発表

- ・ 私は大河原中学校の生徒会副会長を務めており、野球部に所属している。一昨年から生徒会副会長として生徒会活動に励んできた。自分のモットーは「やれるだけやってみる」である。
- ・ 3学年の雰囲気については、ユーモアがあり、またメリハリがついて、オンとオフの切り替えが

しっかりできる明るく元気な学年である。また、先日の中総体では、前日に学年で激励会を行ない、全員全力で応援した。そういった面も踏まえて、3学年はチーム3学年として、一人一人のつながりが強い。

- ・ 次に、生徒会で取り組んできたこと、頑張ってきたことについてである。約2年間、自分は凡事徹底を公約として生徒会活動に励んできた。凡事徹底とは何でもないようなことを当たり前徹底して行うという意味がある。凡事徹底の大切さは多くの側面で重要だと考えていて、品質、創造性の向上、自己満足感と自信を得られる、長期的な成功などがあると思っている。例えば、行事の準備において、話し合いの中で全員が意見を出し合うことで、それぞれの考えについて利点と欠点生まれ、より良い行事につながる。毎日1時間勉強することや話し合いの場で積極的に意見を出すこと、毎日数分トレーニングを行うことなど、何でもない普通のことが大きな結果を出すことになるため、自分は学校の代表として、当たり前のことを当たり前にするを目標に今まで頑張ってきた。
- ・ 生徒会全体としては、昨年までの行事をやってみた反省点やリハーサルを通して改善すべき点を全員で考え、それを行動に移してきた。今年の生徒会スローガンには「創造する、作り出す」という意味を込めてクリエイトを掲げ、これまでの伝統にプラスアルファをして、さらにより良い学校にしていこうと頑張ってきた。
- ・ 次に、3年間の部活動から学んだことについてである。部活動からは、最後までやりきることの大切さや、試合への出場に関わらず、全員で声を出して取り組むことの重要性を学んだ。中総体では負けてしまったが、今まで頑張ってきて良かったという達成感と自信を得ることができ、今までの努力が報われた気がした。この学んだことを、これからの学校生活や受験、高校での生活にも生かしていきたい。
- ・ 次に、大河原中学校の授業についてである。大河原中学校ではタブレットを多く活用しているので、授業がとてわかりやすいと感じている。アプリで学習記録を残して自己評価すること、また、録音して先生に提出することなどが行われ、タブレットを活用することで、よりわかりやすく効率的に授業が行われている。また、効率的に行うことで、1時間の授業で無駄を最小限に抑えることができ、他の学習活動に時間を割けられるので、より学びを深められている。
- ・ 次に、先生方、大人の方々に期待することについてである。私たちは今、中総体や勉強、将来の夢など、様々なことに挑戦している。先生方や保護者の方々には、私たちの挑戦に対して無理という言葉で限界を与えてしまうのではなく、頑張って挑戦している私たちの背中をそっと押して欲しいと思っている。もちろん、子供が挑戦している姿を間近で見て、「これはどう頑張ったってできないだろうな、でも頑張っているから否定したくはないな」と感じる場面もあると思われる。
- ・ そのような時は、ロケットエンジンや機体を製作している植松電器の植松努さんの言葉にもあるように、「どうせ無理」を「だったらこうしてみたら」と言い換えて声をかけてほしい。失敗しても、もう一度工夫して取り組んでみる。それを繰り返していると、無理だと思っていることが、やがてできるようになるかもしれない。
- ・ 自信は、できなかったことができるようになった時、自分の能力が増えたことを感じられた時に自然と生まれてくる自分を信じる力なのだと思う。これからの時代では、得意、不得意の関係がなく創造性を発揮して可能性を感じられる人や、一つの物事に対して粘り強く取り組める人が必要になってくると思う。そこで先生方、大人の方々には無理という言葉でできることを制限してしまうのではなく、前向きな声と信じる姿勢で私たちの可能性を広げてもらいたいと思っている。

【白石市立白石南小中学校 校長 我妻 聡美 氏】 ※意見発表

- ・ 本校は、今年4月に白石市に開校した小中一貫校の不登校特例校で、学校に行きづらい児童生徒が十分に学ぶことができる小中学校として開校した。本校は、落ち着いて過ごせる居場所となること、子供たちが認めてもらうこと、個別最適な学びで意欲と自信を持てるようになることの3点を大切にしている。
- ・ 「学校らしくない学校」というコンセプトで進めているが、その理由は、自分のペースを尊重することを大切にし、登校時間と下校時間を柔軟に設定している。午前3時間、午後2時間授業としており、別室や図書ブースなどでの授業中のクールダウンも認め、どこかに行きたくなる時には支援員が付いていくようにしている。また、個別の学び、学習の保障のために、一人一人の学習状況に合わせて学び直しや苦手な内容に対応もしているほか、学校内外での体験活動の機会を確保

している。「夢スタジオ」という時間を設定し、興味関心に基づく活動、人との関わりを重視した活動を進めており、校外の体験学習では、児童生徒自らが計画し、地域や企業からご協力をいただき活動を進めている。

- ・ 計画見直しの素案では、本校は目標4の基本方向の8、9、10が関係している。これまでも、自分は校長として宮城県の「魅力ある・行きたくなる学校づくりの推進」に支えられてきた1人で、心のケアや教育相談、児童生徒の支援体制を経て、学校運営に取り組んできたものの、学校だけでは子供たちを育てることはなかなか難しく、色々な施策があったからこそ、ここまで進んでこられたと感じている。一人一人の幸せや生きがいを大切にするための計画を実現していきたいと、改めて思った。
- ・ 今年度の学校づくりの概要は、経営方針に当たる部分だが、特に、子供たちには学校の主役は自分たちということをお話しており、子供たちには、自己決定の場、人とつながる場、体験活動の場を大切にしたいと考えている。また、不登校に対する大切な共通理解を5点設定している。本年度は重点事項として三つの柱を設定しており、その中で、学ぶ楽しさについて5点、人とつながる大切さについて4点、様々な環境に対応するしなやかさについて4点を重点としている。
- ・ また、子供たちとの合言葉として「やってみよう」、「ありがとう」、「なんとかなる」、「自分らしくありのまま」ということを言えるようになって欲しいと伝えている。この2か月の中で、入学式など経験したこと、将来の夢を考えさせたこと、これからやってみたい体験活動は何かについて、保護者や児童生徒に感想などを求めたところ、毎日学校に行きたいとか、こんな楽しいことがあって良かったという回答があり、楽しいという言葉がキーワードなのではないかと思われた。
- ・ 2ヶ月が経過したが、これまでなかなか学校に足が向かない子供たちも、自分で決めて登校している。現在19名の子供たちが登校しているが、7割、8割の子供たちが学校に足を向けてくれている。毎日登校してくる子もいるが、中には、自分で休む日を自分で決めていて、自分で決めるということをお認めしていきたいと思っている。
- ・ 子供たちの姿を見てみると、つながりを求めているということをお強く感じていて、その場所として本校を選んで来ている子供たちなのだと思っている。これからも、一人一人に合った学びを大切にしていきたい。

【宮城県柴田農林高等学校川崎校 副校長 小野寺 基好 氏】 ※意見発表

- ・ 今日、小さな学校としての課題、これからの学校はどうあるべきなのかということに絞ってお話をしたい。まず学校の基本情報だが、柴田農林高等学校川崎校は分校であり、農林となっているが、実際には分校で普通科である。創立は75年目で、川崎町唯一の高校である。ただし、大河原産業高等学校の開校に伴い、柴田農林高校は令和6年度末をもって閉校することから、令和7年度に校名が変更になって大河原産業高等学校川崎校となる。なお、現在は柴田農林高校で受験募集しており、入学時は柴田農林高等学校、卒業時には大河原産業高等学校となる。
- ・ 募集定員は40人で1学年1学級であることから、1年生から3年生まで最大入学してもらえれば120人ということになるが、現在の全校生徒数については、令和5年度は64名であり定員の約半分である。過去3年については、令和4年度は60名、その前の令和3年度は68名、令和2年度は72名で、過去十年を遡ると、以前は80名、さらに前は90名いたので、学校の生徒数が少なくなっているという現状である。
- ・ この全校生徒60名の学校での課題は何か、何ができるのかを考えていかなければいけない。一般的な課題を挙げれば、最近は少子化で中学生の数が減っており、急激に増えないことは既にデータが示しているとおりで、受験者の確保も簡単な話ではなくなってきている。川崎町には鉄道が走っておらず、公共交通機関はバスだけで、川崎校前にもバス停はあるのだが減便が続いてかなり不便となっている。生徒が少ないため、限られた範囲での人間関係で、教員数も少ないので限られたカリキュラムや、部活動を一生懸命やりたくとも限られた範囲で行っている。
- ・ これらの課題については、学校の課題なのだからと努力しなさいと言われても、短期間でやれることではなく、中長期でも解決できる目処が立たない。先ほどの中学生の方の発表にもあったが、こういう時は視点を変えること。できないことを数えても仕方がないので、できることを数える、そして工夫していくことになると思っている。
- ・ では、これからのあるべき学校の姿というのはどういうものか。少子化に関しては、川崎校だけの問題ではなく、川崎校のような小さな学校が増えていくだろうと想像するが、そうなった時に

どうあるべきかと考えてみる。キーワードは、やはり学校の魅力化である。特に、川崎校は普通科であるため、普通科の特色は何か、特色を与えて魅力化といったら何か、答えるのはなかなか難しい。

- ・ 外に向けて受験生を増やすことも重要だが、やはり中に目を向けて、生徒が満足できる学校生活で、保護者も満足して、地域の方にも喜んでもらえる、こういうことが魅力化だろうと思っている。では、どのようにしていくか。まず学習については、川崎校には普通科なのに農業という科目・教科がある。科目は細かく分かれており、例えば、農業と環境、農業と情報というように分かれる。
- ・ 農業の一番の魅力は、やはり畑に行って野菜を植えることだが、これが簡単なようで実は簡単でなく、科学的にどの時期に種を植えて、どうやって育てるかということ、生産者として世の中に出すにはどうしたらいいのか、ということの本格的にやっている。だが、農業専門の教員は1人しかいないため、生徒の主体的な活動に頼るしかないのだが、ここに教育の目標がある。大きな学校では、おそらく希望者が何人以下であれば開講しない科目が出ることもあると思うが、本校は生徒数が少ないことから、1人でも希望者がいたら授業を開講している。
- ・ それから、今回の中間の見直しにも入っているデジタルトランスフォーメーションについて、川崎校は遠隔授業の実施校の指定を受けており、今、三年目の実証に入った。遠隔授業にはタイプが二つあって、電子黒板とウェブカメラを使った双方向の授業と、iPadを使った授業の二つに分けて実証中である。具体的には、田尻さくら高校、貞山高校から授業の提供を受けており、画面の向こうに先生がいる双方向の授業で、生徒ともやり取りができるようになっている。これについては実証中なので、まだまだ良い面と悪い面が整理できていない。
- ・ 部活動については、全員加入になっており、先述のとおりバスがなかなか来ないため、時間を持って余すことないように毎日活動している。また、部活動に入るとその部活動ごとに、保健委員会などの委員会を割り当てる合理的な運用を行っている。小さな学校でやれる部活は限られるが、令和4年度の陸上部は、東北大会には新人戦まで含めれば3人行っている。5000m競歩が1人インターハイまで行き、そして栃木国体の宮城代表選手として出場して誇らしかった。今年は県総体2種目で、ハンマーで2年生の女子が優勝した。それから、5000m競歩でインターハイに出た生徒が優勝した。明日から東北大会で、それを抜けるとインターハイということになるが、全校生徒60名のうち陸上部が7名、ここから全国へはなかなか難しいことだと思うが、魅力なところでもある。
- ・ 限られた人間関係づくりだが、本校はボランティア活動が非常に盛んで、全校でも学年単位でもやっていて、ボランティア部もある。加えて、後ほどカワサキクエストと検索してみたいが、そこに総合的な探究の時間に生徒が作った動画が上がっている。地域からの相談に対応する内容となっており、生徒が地域に出て自らインタビューして編集するという非常に大変な作業で、3分間の動画を作るのに半年かけている。縦割りの行事運営も行っていて、3年生が中心となった下級生との共同活動など、やれることは全力でやっている。
- ・ また、県立支援学校岩沼高等学園が同じ校舎内にあり、まさにインクルーシブ教育、共生社会に向けての教育として、限られるが合同での行事もできる。最後に、何と言っても地域唯一の高校のため、川崎町が全面的に協力してくれている。もちろん川崎校も川崎町に全面的に協力する。この協力関係なしにして川崎校はあり得ず、交通が不便なところなので、町にスクールバスの運行について協力をもらっている。
- ・ その他の行事に関しては、実務者連絡会を年2回、総勢20名揃って会議をして年間計画を立て、反省をしてというのを繰り返している。このような形で、小さな学校でも大きな学校に負けない事を進めている。これからの学校の在り方として、一つモデルになるかなと思っている。

【仙南地区子ども会育成会連合連絡協議会 理事 竹川 貴子 氏】 ※意見発表

- ・ 自分は週に4日、小学校で教員補助・支援員として働いており、週1日心のケアハウスでも勤務している。また、子ども会育成会協議会の会長や主任児童委員を務めている。専門的な資格を有しているわけではないが、自分の経験を通じて感じていること話したいと思う。
- ・ まず、計画素案の目標4の基本方向10に関わることだが、現在の大きな問題として、子ども会への加入者が少なくなってきた。子供に限らず、どこの地域でも色々な団体への加入者が少なくなってきたことが課題になっていると思う。子供会は異なる学年・年齢の集団なので、年

上の人や年下の人との関わり方、接し方を学ぶ場だと思っている。これは、令和2年に子ども会の会長らに子ども会の必要性についてアンケートをしたところ、「異年齢での交流や人間関係を広げること」が第1位となった。我々が求めているものと同じであり、保護者との意見が合致したことは大変嬉しく、このことは今の子供達には本当に大切なことだと思っている。

- ・ 核家族で共働きが多いということもあり、なかなか多くの人と接触することは少なく、やはり地域で色々な人と接することが大切だなと感じている。自分が現役PTA会長の頃は、5年から10年ほど前になるが、その頃から子ども会、地区会への加入率がどんどん悪くなっていた。東日本大震災時は、地域のつながりや絆に助けられて、多くの人々の心の支えになったと思う。その時は、学校のお便りの配布や安否確認のため、地区会長が一軒一軒お宅を回ったこともあり、震災直後の子ども会の加入率は、実際に統計を取ってはいないものの、ある程度保たれていたように思う。しかし、時が経つにつれて加入者が減ってきたことは事実で、肌感覚として顕著に加入者が減ってきたと感じたのは、学校で東日本大震災を経験していない学年が中学校に入った頃からである。
- ・ 昔は地域の先輩ママから学校のことなどたくさんを教えてもらい、自然と地域の一員になっていたと思うが、今はインターネットやSNSの普及により、何でも検索サイトに頼って完結してしまう環境なのかと感じている。もちろん個人を重視することは大切だが、地域とのつながりを求めたい人たちも結構な数いると感じている。共働き家庭も増えており、習い事を優先するので仕方がない部分もあると思う。それに加え、新型コロナウイルスの感染拡大によって、3年間でできるだけ人と接触しない生活を送ってきたので、地域のつながりの希薄化が本当に進んだと感じている。一度離れてしまったもの、壊れてしまったものを元に戻すのは難しく、これから新しい形を取り入れながら、今の時代に即した地域のつながりを考えていく時なのではと感じている。
- ・ 家庭、地域、学校、これらが連携して全員で子供たちを育て、子供たちが自分たちは誰かに見守られていると感じられるようになって欲しいと思っている。そこには、目標2の基本方向3、シチズンシップ教育も大事になってくると思う。自分が地域の人に見守られて育ててもらったことに気づき、大人になった時に、自分が社会や地域へ参加する意識が根付くことに期待したい。そして、これは基本方向6の社会の発展を支える力と郷土を愛する心の育成にもつながることだと感じている。
- ・ 次に学校教育に関して、支援員として働く中で感じることとしては、支援が必要な子が各クラスに少なからずいるということ、また、話を聞けない子供が本当に増えているということ。話をしっかり聞くことができる子供というのは、やはり後々に伸びていく。学力が高い子供たちを見ると、しっかり話を聞ける子だと感じている。基本方向4の1学ぶ土台づくりの第一歩は、まず相手の話を目と耳と心で聴くことだどつくづく感じている。それで、基本方向3の確かな学力の育成につなげるためには、幼稚園、保育園、小学校の連携強化が本当に必要であると感じている。聞く力というのは、自分の身を守ることにもつながると思っており、子供たちには非常時にしっかりと話を聞いて判断し、自分の身を守るようになって欲しいと思っている。
- ・ 基本方向6の主な目標指標に、大学への現役進学達成率の全国平均値とのかい離とある。これに関連して、県内の国公立大学が3校あるが、子供たちや保護者から、「宮城県でちょうどいい国公立大学がない」、「レベル的に東北大学はすごく高く、教員志望でなければ宮城教育大学には行かない。そうすると宮城大学しかない」ということをよく聞く。自分には息子が3人いるのだが、全員私立大学に入学して経済的に非常に苦しいところであり、保護者の方々からも「私立は高いし、もう少しなんとか」という意見はよく聞くので、この場でどうということではなく、将来的な子供の選択、親の選択の幅が広がって欲しいという希望を意見として言わせてもらった。
- ・ また、私学教育の振興に関して、我が家は3人息子だが、長男と次男が公立高校、三男が私立高校である。私立高校、公立高校にそれぞれの良さがあるが、通わせてみて私立高校の手厚さや対応の早さというのは企業として素晴らしく、ありがたかったと今でも感じているが、やはり費用がかかる。宮城県では私立高校専願の中学生は少ないと思っており、多くの生徒は公立高校不合格という形で私立に進む子供であり、親も子も必死に通わせているので、今も助成措置はされていると思うが、これからも手厚い支援を続けていただきたい。
- ・ 最後に、基本方向11の生涯スポーツについてだが、自分は16年前よりビニールバレーを楽しんでいたが、コロナで3年間ほど活動ができない状況だった。自分の地区でもやっと4月から活動再開したのだが、自分の地区だけではなく、どこの地区もメンバーが戻って来ていない状況がある。ビニールバレーに限らず、色々なスポーツでも同じように戻ってきていない方が多い状況

と感じているが、久しぶりに話をして笑って動きとても楽しかった。これから徐々に人が戻ってきて、新しい人たちが加わり、息の長い活動を、年齢が上がっても地域の人たちとともにできればいいと思っている。

【一般社団法人まなびの森 代表 坂本 一 氏】 ※意見発表

- ・ 学びの森は、学習塾だと理解している方々も多いと思うが、学習塾をやりつつ学習支援の分野でも活動している。人員配置的には、50%が学習支援活動で残りの50%は学習塾という状況になっている。学習塾を通じて人的資源と財源を蓄えて、そこで培ったものを学習支援の現場に送り出して、活躍してもらおう形になったのが震災からになる。
- ・ 山元町で2011年に被災した子供たちの居場所づくりを実施している。山元地区、坂元地区で週2回ずつ夜間の居場所づくりを行っていて、今日も小中学生が集まって時間を過ごしていると思う。震災3年後の2014年に、縁があって角田中学校に不登校の子供たちの中間的な居場所を学校内につくろうということで、当時の校長先生から声をかけられ、4年間ほど角田中学校の中に居場所をつくって支援に関わった。それから、2019年の台風被害があった丸森町では、我々の活動等を見てきた方々から声かけがあり、丸森中学校の放課後学習支援を始め、その翌春からは被災した子供たちの夜間の居場所づくりに取り組み、今年で4年目になる。今日も、金山地区のまちづくりセンターで、地域の子供たちへの夜間の学習支援として、居場所づくりを行っている。
- ・ 学習支援を通して、我々はまず学習する場所をなくした子どもたちの学習機会を何とかしようという部分に課題意識を持っていて、中学校3年生の子供たちの受験勉強のお手伝いをすれば喜ばれるだろうと、その部分に力を入れてきた。ただ、4年ほど経過した時に、子供たちが必要としているのは学習支援そのものではなく、学習支援を媒介とした関わりや居場所を求めていることに気がついた。その後は学習に限らず、子供たちがそこでどういうことを声に出し、どのような話をしたのか耳を傾けながら、時々勉強もやるという関わり方になってきた。その様子をご覧になりたければ、山元町で月曜日と木曜日、山下駅前の防災センターひだまりホームで開催しているので、活動の参考になればと思う。
- ・ もう1点は、不登校の子供たちの支援で、角田中学校で子供たちの支援に関わった時、最初は学校に行けなかった期間に勉強できなかったことを、学び直しの手伝いをして教室に戻るようになればいいと思い、その中学校の保健室の横にスペースを作ってもらい、そこに子供たちが少しずつ集まってくるといようにしたかったが、実は違っていて、子供達にとって必要なのはまず安心できる居場所だった。
- ・ 先ほど我妻先生が話された内容に、自分は共鳴することばかりだった。不登校という状況で症状が現れてくる以前に、子供たちはものすごくたくさん心に苦しい思いを抱きながら、最後の最後によりやく学校に行けなくなる。冰山を思い浮かべてもらえればと思うが、不登校は海面から上に出た冰山の一角で、その下に子供たちが様々な困難を抱えている。そこを少しずつ汲み取って、話し合いをしながら時間をかけて、少しずつ学校に足が向く子供もいるし、そうではない子供も居ることを勉強させてもらった。その後、その角田中学校での活動に携わった者たちは、ある者は心のケアハウスの、またある者は学習塾の教室長になっている。その時に勉強したこと、学んだことは、子供たちの言葉の向こうにある様々なもの等を汲み取っていかなくてはならないと感じたことである。
- ・ 計画素案への意見については、計画を読んで感じたこととして、学校という機関を前提とした基本計画という捉え方をしたが、果たしてそれだけで充分だろうかということである。もう一つは、「誰もがその人らしく活躍できる」の、「誰もが」という言葉は非常に解像度が荒くて対象も曖昧で、どういう機関を通して進めるつもりなのか、何か荒っぽさが感じられた。そう感じた理由は、実は不登校の子供たちに関わっていると、小学校、中学校は様々な支援の枠組みがあるのに、その後高校に進学すると地域のバックアップが途切れてしまうため、そこで苦しんだ子供たちが、自分たちサポートスタッフのところやサポート校、定時制高校というところになかなか足が向かなくなって、再び家に戻ってしまうという話を聞くことがあった。中学校を卒業してから先、元気に高校に通える、元気に社会参加できるような状況になるまで見守る、あるいは、そこで過ごす場所が必要だろうと思っている。我々が今、課題に思っているのはその部分で、子供たちの居場所づくりに携われないだろうかと思っている。

- ・ 実験的な試みは既に行っており、民間からの助成をいただいて3年ほど、山元町で小中学生の居場所に高校生の居場所を併設して運営したことがある。やはり、そこにいた子供達は、元気に卒業して、世の中に出て行くという印象を持っている。そのような関わりをこれからも続けていきたいと思っている。

【株式会社ヒキチ 取締役社長 熊谷 裕一 氏】 ※意見発表

- ・ 企業代表としてではなく、自分自身の意見として発表したいと思う。会社は、柴田町船岡で機械加工、板金溶接、PEEK加工という、物を削ったり、磨いたり、企業から依頼を受けて物を作っている。従業員22名の、本当に中小企業のものづくり町工場というイメージ。平均年齢はもう50歳以上で、70歳の方もまだ働いている。
- ・ 会社とは別に、有志で作った仙南マシニングクラブという集まりがある。18社が参加し、主なメンバーはその会社の代表者である。職種としては、ものづくり企業が中心というわけではなく、運送業やスクラップ業、機械メーカーなど様々な人が参加している。具体的な活動内容は、個人経営者は孤独なもので、愚痴の言い合いやストレスの発散の場になっている。その中で、企業が抱えている一番の問題としては、やはり若い人が入ってこないことである。当然ハローワークなどに求人は出しているが、来る人は少ない。町工場は、昔は3Kと言われ、実際にそういうところも多いので、1人でやっている企業もあるし、1人では大変だからもう1人誰かいないかなと思ってなかなか来ない、入っても定着しないことがみんなの悩みだった。
- ・ そのような中、何をしようかと思いついたのがコマ大戦で、コマを題材にして小学生からものづくりに興味を持ってもらうために始めた。小さい頃から、皆さん野球やサッカーなど色々なスポーツをするが、好きな人は中学校、高校校と、中にはプロになるまで続ける人がいる。それを狙って、小学生のうちに我々の仕事を知ってもらいたいと思って、加工もできるコマを思いついた。金属で作ったコマは、5分間は回り続ける。コマの作り方は、部品3点を用いて圧入して組み立てたものを自分で回す。コマは、全日本製造業コマ大戦という団体があって、そこに我々も参加して面白いと思ったことから、それを小学生にも広めていきたいと思って続けてきた。およそ6年前から柴田町とイベントを一緒に開催したり、また、全国から我々企業の人たちも集めて大人のコマ大戦を行ったり、その中で、小学生にコマを作ってもらう活動などをやってきた。
- ・ そこで、高校生大会もしてみたいということで、昨年も5回開催し、今年も開催の計画がある。参加してもらうのは、工業系高校で機械がある学校がいいため、宮城県や近県の山形県、福島県などに声をかけて大会を開催し、優勝、準優勝と順位を決める大会を5年間続けている。コロナ禍でもぜひ開催して欲しいという声があり、3年生が中心のイベントのため、できないまま終わらないよう、県の協力も受けながら開催している。その中で、高校生とコマ大戦をしながらも、コマ作りはどういう風にしたらいいのかと学校の先生から相談があり、それなら学校に教えると気軽に言ったところ、今でも丸森の高校にクラフトマンという肩書で通わせてもらっている。
- ・ 県の委託事業でキャリア教育推進事業というのがあり、仙南マシニングクラブとして3年間、小学生を対象に旋盤という金属物を回して刃物を当てて削る装置を使って、その削った時の金属の感覚をぜひ体験して欲しくて、小型の削れる装置を実際に使ってもらった。コマに似たアルミ製のものを削り、ドリルで穴を開けて、ネジを立てるというコマを組み立てる遊びを通じて、遊ぶという表現が教育上適切かは別として、こういうこともあると知ってもらいたかった。
- ・ 高校生は、対決する上でどのようにコマを作ったら勝てるか、こういう作戦で行こうということを生徒たちが自分で考え、我々はこうしてはどうかと伝えて手助けするぐらいである。そこで何個もコマを作り、回し方が一番上手い人を自分たちで選んで大会に臨む。勝ち負けはやはり盛り上がるし楽しく、また、楽しいだけではなく達成感が得られていることは、見ていてもすぐわかる。そういう活動を我々のような実際に仕事をしている人が、苦労話や失敗話などもしながら、一緒に続けていきたいと思っている。
- ・ 学校の先生は大変だと思っていて、旋盤で加工し削れる人もいるが、寸法をどうするか、形をこうして欲しいとなると、やはりプロが教えたほうが良いと思う。旋盤に限らず、農業などでも苦労したこと、大変なこと、こういうところが酷いという部分があるので、将来を選択する材料となるように、もっと早い小学生、中学生の段階で話を聞いて、知ってもらうことは大事だと感じている。なかなか企業の人を呼んで話してもらうことも大変だと思うが、これからどういう方向に進もうかという生徒たちが、大学に行ってもどこに就職する、大学に行っても何を学ぶかという最終

的な進路を決めるには、今の学校生活の中だけでなく、もっと幅広く物事を見た上で進んでいければいいと思っている。

- ・ 高校生が良い企業に就職して長く続けばいいと思うが、この前、角田市で卒業した生徒から、夏に仕事を辞めたという話を聞かされた。その時は「時間あったらうちに来たらどうか」と話したのだが、求人を見て選んで就職し、入社してから少し思ったのと違うと思った時に、そこで頑張るのか、ここはダメだからあちらがいいとか、色々と友達に聞いたりもすると思う。自分に合わなかった理由は色々あると思われるが、もう少し学校が支援することはできないか。ハローワークがあるが、卒業して半年も経たないのに行きづらいただろう。卒業後1年程度は先生に相談すれば何らかの手助けは期待できるかもしれないが、企業側も学校側も入社した子がすぐ辞めてしまったという目で必ず見ると思う。何が悪かったのかは、企業は追及しないと思うが、辞めた事実を受け止めながら、企業側は次こそはいい子が入るように採用活動を進めることになる。当然、辞めたからその人はダメというわけではなくて、もっと何か違うもの、合うものがあるのだろうと思う。当然、失敗はしてもいいが、その失敗を繰り返さないことが一番大事であり、色々な経験をしながら道を切り開いていってもらえばいいと思う。
- ・ 我が社のほとんどは中途採用で、他から辞めてきた人達である。最近は出入りも少なくなり、年々平均年齢が上がっているという心配があるものの、今のところ皆さん元気で働いている。だが、これから10年、20年、少子化の影響もあるので、我々の仕事にはますます就きづらくなるだろうと思っている。ものづくりのことを教えて、1人でも興味を持ってもらう、やってみたいと思う子が少しでも現れることを願っており、教育とまではいかないまでも、楽しくものづくりが出来ればと思っている。

—意見交換—

【一般社団法人まなびの森 代表 坂本 一 氏】

- ・ 先ほども話したが、いわゆるユースセンターという、特にハイティーンの子供たちが立ち寄れるような居場所、子供たちが交流、あるいは立ち寄ることができるような場所というものが、仙台市や石巻市にはあるので、県南地域にもしっかり作ってほしい。それで、中学校を卒業してから社会につながるまでの若者、子供たちの支援になれば、社会に参加できなかった子供たちが定着するための土台になるのではないかなと思う。
- ・ もう一つは、中学校、小学校と関わる機会が多かったこの10年間で改めて感じたことは、学校という機関が持っている多機能性であり、その地域の行政、児童相談所、警察あるいは福祉関係の機関に直接つながることができる、たくさんの機能を持っていること。学校自体が様々な家庭、子供に関する困難なケースを受けるワンストップ機能をもう少し担えると良いと思う。福祉の総合的な視点を持った専門職の方が学校に常駐できると、社会の色々な枠組みの中からこぼれ落ちてしまう人を未然に助け出すことができると思うので、こういった専門職の配置が進んでいくと良いと思っている。

【佐藤副教育長】

- ・ 特に中学卒業後の居場所づくりが必要ではないかということと、学校が他の機関とつながりやすいよう、ソーシャルワーカーなど様々な機関とのつなぎ役となる専門職の配置についてであったが、少しずつ努力しているところであり、そのような機能の強化について、検討してまいりたい。

【仙南地区子ども会育成会連合連絡協議会 理事 竹川 貴子 氏】

- ・ 高校生になってからの居場所づくりは本当に大事だと思う。今回、我妻校長先生の白石きぼう学園は中学校までで終わってしまい、課題はその先にあるものと思う。既に社会人になった我が子の友達に、小学校からずっと一緒だったアスペルガーの子がいて、家族ぐるみで支援しながら普通教室で学んだ。その子は我が子と馬が合い、学校側の配慮もあって、小3から中学1年生か中学2年生まで同じクラスにしてくれたようで、本当に良い関係ができていた。その後、別々のクラスになったが、高校、大学と進学し、今は就職している。
- ・ ご家族の努力や周りの協力が得られて、うまく社会に出られた子供達はあまり多くはないように思う。困難を抱えた子供達が通える公立の白石きぼう学園のようなところがあれば、困難を抱えた

子を持つ保護者に光が見えると思うし、安心できる材料になるのではと感じている。

- ・ 学校で支援員を置いて思うことは、とにかく先生方は忙しいということ。先ほども意見があったように、専門職を置いてはどうかと思う。自分は小学校に勤めているが、児童相談所案件が出た、不登校気味な子がいるという、各担任の先生方はクラスを持っているので、対応は主に教務主任の先生や主幹教諭、教頭先生である。もちろん担任の先生も入るが、色々な仕事にプラスしてそういう案件もという、見ていて本当に大変だろうなと思っている。本当に人手不足は感じているところなので、福祉系専門職の先生がいれば、どれだけ学校が円滑に回るのだろうか強く感じている。
- ・ それから、自分の勤めている学校は2週間に一度スクールカウンセラーが来るが、それでは足りないと思っており、できれば毎週特定の曜日にスクールカウンセラーの先生が来るのであれば、子供達も保護者も安心できると思う。家庭のことになるソーシャルワーカーの先生にも入ってもらっているが、ソーシャルワーカーもたくさんを抱え、色々なところを飛び回っているのが実情なので、対応するための体制づくりが必要だと感じている。少なからず支援が必要な子がいる中、我々のような支援員も足りていない状況で、先生方も忙しい状況である。中学生の話にもあったが、生徒と十分に向き合うためには、先生方にも余裕がないと難しい。先生方も教師である前に子を持つ親であることや、健康も大事なので、先生が子供と向き合える環境をつくっていくためにも、予算の制約があって大変だと思うが、多様なニーズが求められている学校現場に対して人手を増やすことは考えてほしい。

【佐藤副教育長】

- ・ ご指摘のとおり、本当に様々なニーズが、特に高校生の段階にあると実感したところ。そういう意味で、高校でも従来のやり方にとらわれず、通級指導的な形を取り入れるような、様々なタイプの学校があってもいいのではないかと、今後の在り方について検討していきたいと思っている。
- ・ スクールカウンセラーなどの専門家をもっと手厚く配置して欲しいということについては、全ての事情に応えられれば一番良いのだが、どうしても限られた財源の中でやっていく必要があるため、現状行っている部分を工夫しながら、必要性の高いところに優先的に回していくこと、そして関係機関との連携を深めていくことなどを含めて検討していきたい。

出席者名簿

日時: 令和5年6月6日(火)午後6時から
場所: 気仙沼合同庁舎 大会議室

【意見発表者】

※敬称略

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	気仙沼市立九条小学校 校長	白 倉 彩 枝 子	
2	南三陸町立志津川中学校 校長	高 橋 有	
3	気仙沼家庭教育支援チーム	稲 荷 森 裕 子	
4	一般社団法人まるオフィス 代表理事	加 藤 拓 馬	
5	株式会社カネキ吉田商店	渡 邊 重 一 朗	
6	宮城県気仙沼高等学校 3年	内 海 紗 季	
7	” 2年	小 松 輝	

【オブザーバー】

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	宮城県PTA連合会副会長	尾 坪 博 史	宮城県教育振興審議会委員

【事務局】

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	教育庁 副教育長	佐 藤 芳 明	
2	気仙沼教育事務所 所長	樋 川 研 吾	
3	教育企画室 室長	熊 谷 香 織	
4	総務課 課長	鎌 田 光 昭	WEB参加
5	教職員課 課長	鏡 味 佳 奈	WEB参加
6	義務教育課 参事兼課長	千 葉 潤 一	WEB参加
7	高校教育課 参事兼課長	遠 藤 秀 樹	WEB参加
8	特別支援教育課 課長	山 内 尚	WEB参加
9	保健体育安全課 課長	大 宮 司 昭 倫	WEB参加
10	生涯学習課 参事兼課長	佐 藤 孝 夫	WEB参加

出席者名簿

日時: 令和5年6月7日(水)午後6時から
場所: 大崎合同庁舎 501会議室

【意見発表者】

※敬称略

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	加美町立鳴峰中学校 校長	小 野 寺 英 一	
2	大崎市立松山中学校 校長	日 野 口 香	
3	栗原市立金成小中学校学校運営協議会 会長	千 葉 文 彦	
4	特定非営利活動法人ルネッサンスファクトリー 理事長	菅 原 一 杉	
5	キョーユー株式会社 代表取締役副社長	境 弘 志	
6	宮城県古川工業高等学校 3年	宍 戸 遥 太	
7	” 3年	大 和 田 煌 太	

【オブザーバー】

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	宮城県家庭教育支援チーム協議委員	波 多 野 ゆ か	宮城県教育振興審議会委員

【事務局】

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	教育庁 副教育長	佐々木 利佳子	
2	北部教育事務所 所長	齋 藤 卓 也	
3	教育企画室 室長	熊 谷 香 織	
4	総務課 課長	鎌 田 光 昭	WEB参加
5	教職員課 課長	鏡 味 佳 奈	WEB参加
6	義務教育課 参事兼課長	千 葉 潤 一	WEB参加
7	高校教育課 参事兼課長	遠 藤 秀 樹	WEB参加
8	特別支援教育課 課長	山 内 尚	WEB参加
9	保健体育安全課 課長	大 宮 司 昭 倫	WEB参加
10	生涯学習課 参事兼課長	佐 藤 孝 夫	WEB参加

出席者名簿

日時: 令和5年6月7日(水)午後6時から
場所: 大崎合同庁舎 501会議室

【意見発表者】

※敬称略

	所属・職	氏名	備考
1	加美町立鳴峰中学校 校長	小野寺 英一	
2	大崎市立松山中学校 校長	日野口 香	
3	栗原市金成小中学校学校運営協議会 委員長	千葉 文彦	
4	特定非営利活動法人ルネッサンスファクトリー 理事長	菅原 一杉	
5	キョーユー株式会社 代表取締役副社長	境 弘志	
6	宮城県古川工業高等学校 3年	穴戸 遥太	
7	” 3年	大和田 煌太	

【オブザーバー】

	所属・職	氏名	備考
1	宮城県家庭教育支援チーム協議委員	波多野 ゆか	宮城県教育振興審議会委員

【事務局】

	所属・職	氏名	備考
1	教育庁 副教育長	佐々木 利佳子	
2	北部教育事務所 所長	齋藤 卓也	
3	教育企画室 室長	熊谷 香織	
4	総務課 課長	鎌田 光昭	WEB参加
5	教職員課 課長	鏡味 佳奈	WEB参加
6	義務教育課 参事兼課長	千葉 潤一	WEB参加
7	高校教育課 参事兼課長	遠藤 秀樹	WEB参加
8	特別支援教育課 課長	山内 尚	WEB参加
9	保健体育安全課 課長	大宮司 昭倫	WEB参加
10	生涯学習課 参事兼課長	佐藤 孝夫	WEB参加

出席者名簿

日時: 令和5年6月9日(金)午後6時から

場所: 石巻合同庁舎 大会議室

【意見発表者】

※敬称略

	所属・職	氏名	備考
1	石巻市立湊小学校 校長	久保田 健一	
2	登米市立南方幼稚園 園長	星 良	
3	東松島市PTA連合会 会長	松谷 多加子	
4	特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク 代表	伊勢 みゆき	
5	株式会社鮮冷 代表取締役社長	石森 洋悦	
6	石巻市立蛇田中学校 3年	阿部 建虎	
7	宮城県石巻高等学校 2年	佐藤 颯	

【事務局】

	所属・職	氏名	備考
1	教育庁 副教育長	佐藤 芳明	
2	東部教育事務所 所長	高橋 秀夫	
3	教育企画室 室長	熊谷 香織	
4	総務課 課長	鎌田 光昭	WEB参加
5	教職員課 課長	鏡味 佳奈	WEB参加
6	義務教育課 参事兼課長	千葉 潤一	WEB参加
7	高校教育課 参事兼課長	遠藤 秀樹	WEB参加
8	特別支援教育課 課長	山内 尚	WEB参加
9	保健体育安全課 課長	大宮司 昭倫	WEB参加
10	生涯学習課 副参事兼総括課長補佐	太田 純一	WEB参加

出席者名簿

日時: 令和5年6月12日(月)午後6時から
場所: 仙台合同庁舎 201・202会議室

【意見発表者】

※敬称略

	所属・職	氏名	備考
1	塩竈市立第一小学校 校長	堀内 瑞	
2	宮城県宮城第一高等学校 教頭	飛鳥 貴	
3	仙台市PTA協議会 会長	高橋 由臣	
4	特定非営利活動法人アスイク 代表理事	大橋 雄介	
5	株式会社日立ソリューションズ東日本 品質生産性本部担当本部長	小寺 竜太郎	
6	名取市立増田中学校 3年	伊藤 歩太	
7	宮城県仙台二華中学校 3年	千葉 咲玖	

【オブザーバー】

	所属・職	氏名	備考
1	聖ウルスラ学院英智小中学校・高等学校 校長	伊藤 宣子	宮城県教育振興審議会委員
2	名取市立増田中学校 校長	玉野井 ゆかり	宮城県教育振興審議会委員

【事務局】

	所属・職	氏名	備考
1	教育庁 副教育長	佐々木 利佳子	
2	仙台教育事務所 所長	星 和彦	
3	教育企画室 室長	熊谷 香織	
4	総務課 課長	鎌田 光昭	WEB参加
5	教職員課 課長	鏡味 佳奈	WEB参加
6	義務教育課 参事兼課長	千葉 潤一	WEB参加
7	高校教育課 参事兼課長	遠藤 秀樹	WEB参加
8	特別支援教育課 課長	山内 尚	WEB参加
9	保健体育安全課 課長	大宮司 昭倫	WEB参加
10	生涯学習課 参事兼課長	佐藤 孝夫	WEB参加

出席者名簿

日時: 令和5年6月13日(火)午後6時から
場所: 大河原合同庁舎 201会議室

【意見発表者】

※敬称略

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	白石市立白石南小中学校 校長	我 妻 聡 美	
2	宮城県柴田農林高等学校川崎校 副校長	小 野 寺 基 好	
3	仙南地区子ども会育成会連絡協議会 理事	竹 川 貴 子	
4	一般社団法人まなびの森 代表	坂 本 一	
5	株式会社ヒキチ 取締役社長	熊 谷 裕 一	
6	大河原町立大河原中学校 3年	佐 藤 絢 香	
7	" 3年	島 貫 晃 輔	

【オブザーバー】

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	宮城県拓桃支援学校 校長	小 澤 ち は る	宮城県教育振興審議会委員

【事務局】

	所 属 ・ 職	氏 名	備 考
1	教育庁 副教育長	佐 藤 芳 明	
2	大河原教育事務所 所長	本 田 史 郎	
3	教育企画室 室長	熊 谷 香 織	
4	総務課 課長	鎌 田 光 昭	WEB参加
5	教職員課 課長	鏡 味 佳 奈	WEB参加
6	義務教育課 参事兼課長	千 葉 潤 一	WEB参加
7	高校教育課 参事兼課長	遠 藤 秀 樹	WEB参加
8	特別支援教育課 課長	山 内 尚	WEB参加
9	保健体育安全課 課長	大 宮 司 昭 倫	WEB参加
10	生涯学習課 参事兼課長	佐 藤 孝 夫	WEB参加